

日本体育学会

体育心理学専門分科会会報

第5号 1993年5月10日発行

〈発行〉
日本体育学会体育心理学
専門分科会
(代表/上田雅夫)
〈事務局〉
〒359 埼玉県所沢市
三ヶ島2-579-15
早稲田大学人間科学部
スポーツ心理学研究室
Tel 0429(49)8111(代表)
内線3568・3578
(事務担当/山崎勝男)

●第43回日本体育学会 体育心理学専門分科会 シンポジウム●1992.12.23/於大妻女子大学

「スポーツを通しての環境教育の可能性を探る —— 体育心理学の新たなパラダイム ——」

司会者 市村 操一 (筑波大学)

演者 松村 和則 (筑波大学) : スポーツと環境の摩擦の反省の上に
—— 「スポーツと環境」の社会学を目指して ——

吉崎 満雄 (緑営グループ会長) : スポーツと環境の共存, そしてスポーツを通しての
環境教育 —— スポーツ企業の実践例 ——

司会 市村 操一

○司会: 皆さんお早ようございます。朝の早い時間からお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。本年度の体育心理学分科会のシンポジウムのテーマですが、「スポーツを通しての環境教育の可能性を探る——体育心理学の新たなパラダイム——」という課題で、私、筑波大学の市村が司会をさせていただくことになりました。

早稲田大学の事務局の上田先生の方から、今年度のシンポジウムのテーマとして何かふさわしいものはないかというアンケートをいただきました。

今年は世界環境会議などがあつたりしまして、私個人といたしましても、環境の問題をいろいろ

と考えていたところですので、まだ構想が十分練られていたわけではございませんが、上田先生の方へ、全く新しいテーマかも知れないけれども、こういうテーマはいかがでしょうかとアイディアをしたためまして、ご返事を差し上げました。

運営委員会の方でこのテーマをやろうということになったので、なんとかしろというご返事をいただきまして、私の身近な方々をいろいろ思いめぐらして、ご都合を伺いまして、筑波大学のスポーツ社会学の松村先生と、私どもの学会の会員ではございませんが、皆様もゴルフ場の名前をお話するとお分かりになると思いますが、緑営グループの吉崎さんをお願いしました。

吉崎さんが開発した冬、真夏の暑さにも枯れないというベントグリーンを使いまして、とてもす

ばらしいゴルフ場をあちこちに展開されております。東京湾スプリングスカントリークラブとか、児玉スプリングスとか、最近では日本の本格的なリゾート構想の中に滞在型のゴルフ場を作っていこうという、小名浜スプリングスカントリークラブというものをお造りになりました。スプリングスとついているところはみんな吉崎さんの会社ということであります。

特に千葉県などで農薬の問題が出ましたときに、率先して吉崎さんの会社では、無農薬で経営するゴルフ場をやってみるという、非常に挑戦的なお仕事をされていた方です。

今日は吉崎さんから話を伺うのが主旨ですから、いろいろの実践例でスポーツと環境がどうやって折り合っていくのかという話をさせていただきたいと思います。

少しお時間をいただきまして、どうしてこの環境問題をスポーツの中で、とくに体育心理学の中で提案させていただいたかという主旨の説明をさせていただきますと思います。

皆さんご存じのように、近代の経済というものが、経済の無限の発展を目指して人々が努力してきたわけです。資本主義であっても共産主義の経済学であっても、富の配分をどうするのかということでは意見は違いましたけれども、どんどん働いて人々が豊かになろうではないかという考え方で来たのだと思います。

日本語の経済というの、経世済民という言葉で民を救うということです。ところが民を救うためにどんどん産業を発展させて、経済を高めてきたら、おやおや地球環境はこれ以上の発展を許してくれるのかという限界にぶつかってきているという経済の状態が私たちの社会にあるわけです。

全くそれと同じように、私たちは体育とかスポーツというものを人々にお教えし、そして人々を指導して、豊かな生活を作っていただきたい、そして健康になってほしいと、そう願って仕事をしてきたわけです。これからもそうでしょう。しかしその人間の健康をめざしながら、スポーツ施設を作っていく、そしてスポーツ活動をやっていく、

それが巡り巡って、人間の健康に逆襲をし始めたという時代があちこちにきているのではないかという気がします。

今日は吉崎さんは、たぶん非常に苦しい立場で、ゴルフというのが魔女狩りのように世間の非難を浴びているわけですが、決してゴルフだけではありません。スキーもそうです。

ちょっと振り返ってみますといろいろな問題が出ています。たとえば品川区の区立の中学校で、昼間働いている人たちに夜自宅に帰ってきてから、近くの中学校でテニスができたらいいのではないかということで、中学校のテニスコートの夜間開放を教育委員会が指導してやりました。ところが、周りの住民から夜になってもボールの音やかけ声が騒々しくて、とてもではないけれども耐えられないという苦情が出てきたのです。品川区はその問題を解決するのに大変な予算を使いました。住民との話し合いもずいぶんやりました。そして騒音測定器を作りまして、初めは住民は騒音測定器を仕掛けておいて、ある騒音以上になったら夜間照明の電気がパタンと消えるようにしろと教育委員会に要求したのだそうですが、結局のところはパトカーの屋根についてくるくる回る警報ライトをあちこちにつけて、ある音以上になったらランプが回りだして「ご静粛に」というようなことで決着をしたというようなことです。

このような問題は、とくにヨーロッパの「緑の党」などが非常に強いドイツでは、テニスコート一つ作るのにも、住民との間に大変な問題が起きている。とくにテニスコンプレックスというようなたくさんのテニスコートを作るときに、森を伐ることは、大変な問題になってきています。先ほどお話したような品川区の問題というのは、ドイツでは裁判に訴えられまして、裁判で100戦95敗くらいスポーツの側が負けている時代がきています。

それは人ごとではないのです。私ども自分たちの運動場のグラウンドの砂塵が茫々と近隣の住宅へ飛んでいく。学校は偉いんだ、教育はいいことをやっているのだから少々我慢しろという論理は

もう通らないでしょう。ゴルフ場だけが除草薬を使っているわけではありません。学校のグラウンドの隅の方に除草薬を全然撒いたことのないという体育教師は少ないかも知れません。学校の体育館の屋根に降った雨水というのはどこへいつているのですか。土にもう一度戻らせて、地下水を豊かにしようなどということは理解はできるのですが、いまはたれ流しです。

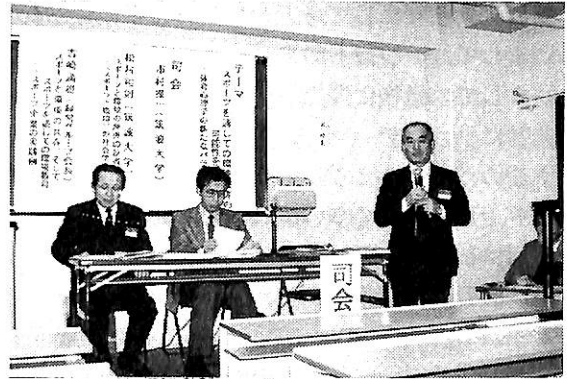
皆さんが攻撃するようなゴルフ場でさえも、最近雨水を一度貯めて、ゆっくりと地面に戻しながら自然に返していこうという努力をしているわけです。そういうことを考えますと、私共も沢山のことをしなくてはいけないという体育者自身の反省がございます。

それと同時にそういうネガティブな面だけでなく、我々は子供たちを自然との触れ合いの中で育てていくという非常に大きい役割を持っている。将来へ向かっての現代人の、あるいは未来人の最大の道徳はなんだろうかというのを考えたときに、嘘をつくこともあり、人を殺すこともあるでしょうが、最大の罪悪というのは、地球をぶち壊すことだと思います。そういうような観点に立ったときに、私たちは自然との触れ合いの中で、子供たちを教育するときに、最も大切な倫理というか、道徳というものを教えるチャンスに恵まれている教育者になれるのではないかなというようにも考えております。

教育学の中でも、環境教育が、エンバールメンタルエデュケーションという領域が非常に重要視されて、沢山の方がそういうことに関心を持ち始めている。

本当はシンポジウムを開くためにはかなりの研究の蓄積がなければいけないのですが、今回のシンポジウムはいろいろな研究成果をここに披露するというよりは、われわれが自分たちの頭の中の考え方や、枠組みを少し考える転換の時代だと思います。

そんなわけで今日はお二人の先生のお話を伺って、本来はシンポジウムというのは、発表者を三人ぐらいをお招きするのですが、今回はお二人に



いたしまして、皆様の中からのいろいろな経験とか疑問とか、ご意見を出していただいて、ディスカッションを進めたいと思います。

シンポジウムというのはギリシャ語が語源だそうです。語源の意味は酒を飲みながらわいわいと議論をするというのがシンポジウムだそうです。お二人の先生方からお話を伺いまして、充分時間がございますので、ご参加の皆さんからいろいろとご意見を出していただけたら幸いです。

それでは最初に、松村先生のスポーツと環境の摩擦の反省の上に—「スポーツと環境」の社会学を目指して—というお話をお伺いしたいと思います。それでは宜しくどうぞ。

スポーツと環境の摩擦の反省の上に —「スポーツと環境」の社会学を目指して— 松村和則

お早ようございます。先ほどご紹介のありました、筑波大学の松村と申します。いま卒業論文とか、修士論文の時期で、学生の指導もなかなか大

変です。往々にして最近の学生は二手に分かれて
いまして、一つはものすごく大きな大テーマを掲
げまして、最後に爆発して書けないというのと、
非常に小さなテーマで、そんなことを調べてどう
するのだというような学生もいます。彼らは12月
から1月にかけて辛い思いをする時期なのですが、
今回は私も同じ思いで、私の場合はどちらかとい
えば前者の方なのですが、爆発寸前というところ
です。

この「スポーツと環境の摩擦の反省の上に」と
いうのは、市村先生から頂いた題なのですが、副
題は少し無理をして付けてみたわけなのです。

このシンポジウムは心理学のシンポジウムなの
ですけれども、題をいただいてから4、5ヶ月あつ
たものですから、少し同僚の先生にでも聞いて、
スポーツ心理学のにわか勉強をしようかなと思っ
た時期もありました。そんなことをしても、どう
せ付け焼き刃でねたが割れるのは分かっていたか
ら、9月早々にあきらめてしまいました。そこ
で、自分の専門のスポーツ社会学の領域を中心
としてお話させていただいて、なんらかの参考にな
れればと思って出かけてまいりました。

そういうふうに考えたわけなのですが、しかし
こういうテーマを設定したときに、いま市村先生
の方からガイドラインがでておりましたが、私自
身もどうしてこういうテーマをやるのかというこ
とを少し考えてみました。しかし残念ながらこの
環境問題というのは、私たちの親学問の社会学の
領域でも、昨年環境社会学研究会というのがよう
やくできました。関東社会学会で今年の6月に報告
を求められたのですが、社会学会の中では、初め
てそういうテーマでシンポジウムが持たれたとい
うのが事実です。

そして同年の12月に体育心理学専門分科会で、
この環境問題を取り上げるというのは、これは正
直にいいまして、母屋をとられたような感じで寂
しい思いをしています。今どうしてもスポーツと
環境の問題を考えなければいけない、それはどう
してなのだろうかと自分で悩みまして考えていま
した。

私の友人である北海道教育大の前田さんは、一
昨日飛行機で東京へ来たのだけれども、「いやです
ね」というのです。なんの話かと思いましたが、
千葉県で飛行機が旋回しますと、そこから見える
のはミミズがはったような房総の風景が見えるだ
けだということです。日常生活ではそういう鳥瞰を
する機会がありませんので、ほとんどそんなこと
はあんまり考えてみたことはないのです。鳥にな
ってみたいとどうもそういう何か寂しい心境には
ならないようなのです。

私はスキー場の開発問題とかゴルフ場問題も研
究しております。しかし今日は緑営グループの社
長さんの前座ということで、話をすることになっ
ていますので、ゴルフの問題をやるのはちょっと
竹槍で突っ込むようなものなので止めまして、ス
キー場の開発問題を考えてみたいと思います。こ
ちらは僕のテーマなので、後に調査している事例
でお話をしてみたいと思っております。

ところでこの環境論というのは非常に研究し難
いテーマです。どうしてか。社会問題としてアプ
ローチする必要があります。それからもっとい
うと現実の政治の問題とどうしても接点を持っ
てしまいます。これはテーマとして取り上げるとき
に、非常に勇気が必要です。

心理学ではどういうふうに考えるのか私には分
かりませんが、私は社会学の研究者なので、これ
は非常に辛い選択です。ですけれども、何かにせ
かされてどうしてもこのテーマをやらなければい
けないなというふうに思うようになりました。ま
ず今日の報告にさしあたって、どんなことをお話
するかを2点か3点ぐらい簡単にお話してから、
ゆっくりと報告をしていきたいと思います。

まず、スポーツ社会学が私の所属する研究室な
のですが、別にスポーツ社会学というふうに限ら
なくて、社会学の問題だと考えてもいいかと思っ
ています。その立場でスポーツ社会学の反省、学
史的な反省を私なりに考えてみたいと思っていま
す。

そこで出てくるのは、これまで「現場」という
のは、学校だったというふうに思います。社会体

育とかさまざまな言葉が作られています、やはり学校を現場として一生懸命研究を続けてきたということです。また最近は体育でなくて、スポーツだということなのですが、スポーツは最近論じられるばかりでありスポーツの現場感覚に富んだ研究は、残念ながら私の周りにはあまり見ません。

一昨日、体育社会学のセミナーもあったのですが、たいへん大勢集まりまして驚きました。そこには一つの合意があったようです。高齢者とスポーツというテーマだったのですが、私には都市のサラリーマン層の、あるいはリタイアした高齢者というふうにしか話を聞くことができませんでした。非常にこれは不思議なことだと思いました。

何故都市に限定されてしまうのだろうか。では農村、漁村、山村はどうするのだろうか。経済的には価値がないといわれていますが、実際に住んでいる人は非常に多い。農業集落に居住している世帯が2,000万世帯近くもあるという統計があります。そういうふうに考えると、ちょっと私は納得できないのです。

そういうことを考えていきますと、どうもスポーツというのは、抽象的に語られるばかりで「現場」がない、さらにいうとスポーツは記号として消費されているに過ぎないような雰囲気になってしまいます。そういうふうに一昨日のスポーツ社会学のシンポジウムを受け取っていました。

次には自分が考えている現場というのはなんだろうか、という自分なりの考え方を今日述べなければいけないと思います。私は「調査屋」だというふうにスポーツ社会学の仲間では了解がついております。「現場へ行く」といったときには、思考とか読書をその時点で止めなければいけないのです。車で行くのはあまり好きではないので、なるべく電車に乗って調査に行くのですが、理論の本を読んでいたらものすごいフラストレーションが溜り、苦しい思いをします。これはどうしてでしょうか。理論的思考とか読書をその時点でぴたっと止めないと、現場には入れません。

私は現場主義を徹底したいと思っています。ど

こにでもいる人の話はしたくないのです。もっというと、一昨日の高齢者であれば、のっぺらぼうの高齢者というものを議論しても意味がないと思うのです。何のだれべえという「高齢者」を論ずる必要があると考えています。その時の方法論は、スポーツ社会学ではあまり馴染みがなくて、何だおまえのは単なる事例報告ではないかというように、一刀両断にされてしまいます。

しかし個別の中に普遍性を探るというのは、結構現代の思想の中には根強いものがあります。筑波大学の中込さんから紹介されて、河合隼雄さんの本とか、非常に面白く読ませてもらっています。そういう思想の流れは確固たるものがあると思います。哲学には「臨床の知」という考え方もあるのは周知のことです。そういう意味で私は現場主義なのですけれども、個別の中に普遍性を考えてみたいという立場で勉強しています。

最後に、どうしてもこのシンポジウムで自分なりの提案みたいなことをしなくてはいけないというふうに思っていました。つまり単に現代スポーツを批判するというものではありません。あるいはゴルフ場開発を簡単に批判しようとは思っていません。それは天に唾するようなものです。私はテニスが好きですけれども、テニスのボールが非常にもったいないなあと思いながら、まだ結構使えるのに捨てたりしています。消費社会の中の自分が、何ができるかを考える必要があるのです。

そういうふうに考えますと、私は大学で研究していますし、教育をしていますので、大学という現場でどういうふうにしたらいいのだろうかを考えなければいけないと思います。やはり「実践」というものが必ずそこにある。机上の空論ではないということです。私はスポーツを客観的にとらえて何かを描こうというのではなくて、「スポーツの世界」を創っているのだという立場に立つべきだと思いました。また、その有利な位置にいるのだということにも気がきました。

この「スポーツと環境」のテーマというのはスポーツ社会学のジャンルでは世界を見回しても、

それから日本の中でもあまり多いとはいえません。しかしながら、アメリカの農村社会学の中では、タンロをはじめとして有名な研究者が環境問題をやっております。レジャーの領域では結構やっているのですが、スポーツ社会学としては、非常に少ないのです。私がみたスポーツ社会学の国際誌でゴルフの環境問題に少し触れた研究ノートが1本、それから今日レジメの1ページにあげておきました、リーゲルと読むのだと思いますが、ドイツの学者で、「危機的社會の中のスポーツ」というテーマの論文があるだけです。

市村操一先生とか、体育哲学の近藤良享先生と一緒に勉強会をした時読んだ加藤尚武氏の『環境倫理学のすすめ』（丸善）に非常に感銘を受けました。そこで引用してあるのは、『バイオエシックスとは何か』という、とても読みやすい本なのですが、中身は難しい本でした。

この二人の論文、あるいは本を読んでも非常に面白いことに気がつきました。それはハンス・ヨナスという、ナチスから逃れてアメリカへ行った哲学者なのですが、「責任の原理」という本も出している、そのヨナスの哲学に非常に影響を受けているということが、偶然でしたけれども、分かりました。リーゲルさんはドイツではヨナスの哲学はあまりメジャーではないと書いておりました。

双方にある一つの筋というのは現代がリスクに満ちているという認識が一つ。それから産業社会がもたらす帰結は、つけとなって次の世代に残してしまうということです。

加藤先生のいい方に習えば「世代間倫理」というものの確立が大事だという話になってくるのです。世代間倫理というのはこれは非常に難しいことだと思います。われわれはよくコンセンサスとか、相互性とか、相互作用とか、対話というのですけれども、ドイツの哲学でもこれは非常にいま名前を別にあげなくてもフランクフルト学派的非常に新しいところでも、そういうことを一生懸命にいいます。このヨナスはそういう相互性の倫理だけでは駄目だ、世代間の倫理だといういい方

をしてきております。

さらに地球規模の問題とか、さまざまにいわれるのですけれども、このリーゲルさんも書いておりますが（レジュメ参照）、現在の危機はどちらかといえば抽象的な現象である、言葉と議論を通してようやく経験できるものであるのだというふうにいっております。抽象的な危機なのです。抽象的な危機というのがあるのか不思議な話なのですが、語られるものとして、危機として存在するということです。

さまざまに考えていきますと、実際の研究を遂行するエネルギーやコストを考えると、この環境問題というのをやるのはどうも割に合わないなということで、大体の人が撤退してしまいます。

さて、一般論よりもスポーツ社会学の問題について考えてみたいと思います。私たちスポーツ社会学者は、ブルデュー（仏の社会学者）によると社会学者からは侮られて、スポーツの関係者からは軽蔑されるということです。ずいぶん酷いことをいうものだなあと思うのですが、実感としては非常によく分かります。

体育の世界の潜在構造とレジュメには書いてあるのですけれども、平たくいえば俺は理論派だ、俺は実技を頑張っているのだ、と口では申しませんが、自然と体に出てきてしまいます。そういう対立構造の中にわれわれ体育の研究者、教育者がいるとP.ブルデューはいうのです。

そういう構造の中でみますと、身体性の問題とか、卓越性の問題は、俺は優れているのだぞというのが非常に状況的に規定されていることがよく分かります。スポーツ社会学について考えてみますと、どうもそういうところを潜在構造として持ちつつも、スポーツを独立した領域として設定して、親学問の最先端を一生懸命適用しようと腐心してきているというふうに思います。私もその片棒を担いでいるのかも知れませんが、そういうことです。

また、スポーツ振興のイデオロギーというのは非常に強いというふうに考えます。こうした潜在構造に縛られていると、スポーツは想像以上にパ

ワーをもった存在だということを自覚しえなくなってしまうのです。もっと現実にパワーを持ったものだと、スポーツはもう持ってしまったというふうに私は考えるべきだと思います。

もう一つ、このスポーツ社会学の中でスポーツと環境の問題が取り上げられなかった理由は、先ほどいいました政治性の問題です。この問題は西欧世界の中でエリート性というものがあって、それに対する嫌悪感だろうというふうにも考えます。そういうことがわれわれが環境問題に接近できなかった理由ではないだろうかと思えます。

現在はスポーツの時代だというふうに、どんなところでもいわれますし、我々もそういう時代を共に生きているのだろうと思えます。スポーツ産業も隆盛しております。今日は煩雑になりますので、データを持ってきませんでしたが、スポーツ産業が隆盛するというのはのですけれども、ハンドボール産業というのはあまり聞いたことがありません。ハンドボールの先生がおられたら申し訳ないのですけれども、マイナーなスポーツにとどまっていると思えます。そうしますと、資料を丁寧に見ていけば分かるのですけれども、特定のスポーツに偏って隆盛があるのです。これは余暇センターから出ている資料を丁寧に再分類してみても分かります。

リゾート法が出て問題になりましたけれども、巨大な施設というものを必要とするスポーツがどうしても流行るのだということなのです。これは事実です。ゴルフとかスキーです。そうするとこれを流行らせているのは誰だろうか、あまり時間がないのですけれども、誰かが流行らせている。また誰の利益になるのだろうか。こういうことを考えなさいというのが、ピエール・ブルデューのいい方なのです。彼は非常にラディカルで、怖いことをいう人なのです。

もう少し平たく考えてみますと、現在はさまざまなスポーツが盛んになってきていますけれども、やはり「するスポーツ」では今いったゴルフとかスキーなののですけれども、「見るスポーツ」ではマラソン、駅伝、甲子園の野球、相撲とか、そうい

うようなものが非常に伸びてきております。そこでみるのは作られるヒーローだろうというふうに考えます。

始めに申しました、記号として消費されてしまうスポーツあるいはスポーツマンそのものが、現在社会からいつのまにか疎外されていく状況が創られている。これを自覚していないところに非常に大きな問題点があるというふうに思えます。もっと広く考えてみれば、先ほど体育社会学の専門分科会でのシンポジウムにありましたように、都市的世界というのは非常に一般化してきている。さらにいうと我々は気付かずに都市文化を身につけてしまっている。ですから気にすることはない。いつのまにかそういうことになっている。

一昨日の体育社会学のシンポジウムで高齢者は個人のスポーツから出発すべきだとか、いろいろなことをおっしゃっていましたが、そうとはいえないスポーツもたくさんあります。しかし、そういうふうにスポーツの研究者がはっきりという。その研究者もやはり都市的世界を身につけているのだろうと思えます。

こういう議論ばかりしていますと、どうも宙に浮いて実際にどうなんだろうという疑問が私には出てきます。それで現場に通うということになります。場所を特定するのは問題があると思いたので、どことは申し上げないで話を進めていきます。東北の一地域であります。写真を2枚印刷したものをつけてまいりました。1枚はドイツだそうです。これは私の友人が送ってくれたのですが、ずいぶんきれいですね。その下が日本の現実であります。これはちょっとコントラストをつけてみました。どうも夏のスキー場というのは非常に無惨な景観になってしまいます。

聞くとところによると、オリンピックの滑降のために山の頂上に何メートルか足りなかったから、コンクリートでわざわざ出発台をつくったということも聞いております。ルールを変えてしまえばそんなことをしなくていいのではと、私は思ってしまいますがどんなものなのでしょうか。さらに左側の方にスキーのコースがありますが、これはもの

すごい大きな開発です。名の知れた大手の企業が数10社、その中に2つ、航空会社とホテル会社が入ってしまっていて、1,500億円ぐらいの開発で、巨大なスキー場ができます。来年か再来年オープンすると思います。

その下はこの山の裏側に今年の12月にオープンする、もう宣伝しています、テレビの深夜番組などでもどんどん出てくる造成中のスキー場です。そうした写真をパラパラ見ながら話を聞いていただければありがたいと思います。

ついでですのでもう1枚資料があります。これはこの山の裏側の風景です。いちばん右手の裏は、非常にきれいな湖ですが、よく近寄ってみみると写真に泡が浮いておりませんが、これは生活廃水です。まん中はこれはかつてこの山は登山と信仰の山でした。その登山口にあった温泉街、小さな民宿街になっております。どんどん民宿が潰れております。さらにその隣にあります民間のデベロッパーが造成したリゾート地であります。障子が破れているのを撮ったのです。人影が全くありません。それから左側の写真はあとで申し上げますが、このスキー場開発によって非常に活気づいた村がかつて昭和40年代、開墾した畑であります。非常に荒れています。百町歩ありますが、ほとんど使われていません。大根を2年作って放置されています。ですから第1次産業も公害、環境破壊だという理論もなるほどと納得します。そのたった2年で得た収入でこのW村は民宿をどんどん開業しています。非常に先駆性に優れているというか、これもまさしく都市の文化を身につけたリーダーが、温泉を掘ろうということで、集落内の10軒余りが8,000万円の借金をします。普通こんなことは不可能です。全部借金です。それをどこからするかというと、外国の銀行からします。山深い集落のおやじさんたちがこんな大胆なことをするのは。スキー場の開発に合わせていち早く温泉を掘る。18人ぐらいで始めますが、やはり途中では抜けていく人が出まして最後に11人残り、いまはものすごく繁盛しています。大変な収入になっています。そういうことも「現場」で起こります。

考えてみますと、現場にいきますとこんなスキー場開発がどうしてできたのだろうかというふうに思います。ここ以外にもスキー場の開発地をここ3年ぐらいずっと歩いています。そこで見聞きするのは40年代の酪農政策の失敗であります。村の共有地をリゾート会社に売却するというスタイルになっています。第3セクターは土地対策として作られて、またその第3セクターの資本の割合がどんどん民間に移譲されて、最後は地元の自治体の出資率は数パーセントというところになっていくのです。あとは企業の思いのままです。

一言でいいますと、山にもう人はおりません。山里も非常に荒れています。いろいろなところでいわれていますけれども、全くの自然というのは本当に少ないわけです。知床とか白神山地とか……。日本の自然というのはほとんど人間が管理をしてきた「自然」であります。そこで人間がいなくなったらどうなるのかということは、まさしく社会学のテーマなのです。

スキー場開発は、これに対して経済効果をもたらそうということで作られるわけですが、実際にはなかなかそうはいかないのです。そういう環境の激変に対応できる人だけが生き残っていきます。消えていく村もたくさんあります。この1987年のリゾート法によって網がかかったところと、かからない隣の市町村というものもあります。

こういう地域の中で新たな文化的な差、あるいは経済的な差というものをスキー場開発が創り出してしまいます。先ほどの写真でお見せしましたが、どうして南側に斜面を作るのだろうか。北側に非常にいいスキー場ができて、南側の市町村は非常に焦りました。それで国体だということになるわけです。そういうものに対抗して、わが町にもどうしても、というふうになるわけです。もっと大きな地域を想定して連携していくような考え方をしていけばそうではないと思うのですが、残念ながら現実はそのようなふうでありまして、大きなお金が動きます。80億円をかけて緑を切り倒し、スキー場の造成をしたと聞きます。

もう一つ、私は専門家ではありませんけれども、

どうしても自分でそういう汚れというものを測定してみたくまりました。自分では初めはできないので、うちの大学の生物の学生と一緒にいきまして、2枚目の写真の下にありますようにして、水を汲み上げて調べてみました。そんなに大きな汚れはございませんでした。しかし、ある公営のホテルの排水はとんでもない値が出たり、一日のある一定時間に非常に大きな汚れが出ています。それからそういう川がどんどん集まった最後の本流になって流れるところの少し手前のところで調べてみますと、本当かどうか信じ難いのですけれども、うちの汚くてどうしようもないという霞ヶ浦に流れる桜川と全く同じどぶ川の値を示しておりました。データを出せばいいのですがちょっと問題になると思いまして止めました。

環境基準値はあるのです。県も調査をしていますが、私たちが調べたデータではその2倍を示しております。一日中調べる根性はきっと行政マンにはないと思いますが、彼ら若い学生の一時間おきの定点調査では確実に汚れていることが分かります。そうした汚れた水は最後は非常に大きな湖に行きまして、その湖は東北の大都市の水瓶になっております。つまり、スポーツを目玉としたリゾート開発が着実に地方を変えてきています。自らがつくり出した汚れは、巡り巡って自分達の口の中に入るのです。そんなことを調査の現場で考えました。

もうそろそろ時間なので、最後に纏めなくてはなりませんけれども、レジメに考えたことを羅列してありますので、そこを見ていきたいと思うのです。

スポーツと環境の問題を考えたときに、どうしても自分の専門というのを飛び越えなければいけないと、ようやく分かってきました。

それからもう一つは「研究の抽象度をあげない努力」とそこに書いてあるのですが、それはそうではないのです。抽象度の高いことも必要なのですけれども、もう一つやはり「現場主義」みたいなものがどうしても必要だ。そうではないと研究のパスションが続かないのです。こんなことをや

ってどうなるのだろうか、途中で投げ出したくなってしまうので、現場へどうしても通わなければいけない。

さらに、スポーツの分析をきちんとしなければいけない。ブルデューは白いテニスのシューズをはいてパリのクラブでやるテニスと、ルノー5という大衆車に乗ってリゾートのどこかのハードコートでやるテニスは、全く違うスポーツであるというふうにいいました。この含意は非常に示唆的であります。同じスポーツであって、スポーツではないということになります。

もっといいますとスポーツというのは今なぜそんなに騒がれるのだろうか。あるいはそれが隆盛するのだろうか。これはスポーツが持つ象徴力の結果だろう。こういうスポーツの象徴力というのはスポーツ隆盛の背後にあるのだなということです。もっといいますとスポーツを生産するのは誰だろうか。あるいは再生産してきたのは誰でしょうかということなのです。そういう問題に行き着きます。

最後に、実践としての「環境とスポーツ」の社会学を創るために、どうしても個性を持った「場所」というものを作り出す努力をしよう、またそれを続けていこうと考えています。そんなことを考えますと、どうしてもこれはスポーツだスポーツだというふうにもいっておられません。やはり体育、あるいは教育の世界へまた舞い戻ってしまうのかなというふうにも思いました。今一生懸命勉強をしているのですけれども、・・・あまり追いつきません。しかし、野外教育とか、あるいは自然教育とかが、危機を孕んだ現代社会とスポーツの世界の折り合いをつけるために登場する必要があるだろう。やはり体育、あるいは大学の中に生きている研究者として、どういうことができるのだろうかというふうに考えつつあります。どうもありがとうございました。

○司会：皆様のご質問はお二人の発表が終わりましてからですが、司会者の役割として一つだけ質問させていただきたいと思っております。たいへ

ん貴重な実地調査に基づく発表をいただきましてまことにありがとうございます。私はよく纏められるかどうか分かりませんが、たとえばスキー場の例をとってみますと、スキー場のインフラストラクチャーといいいましょくか、設備です、付帯設備を作っていくために非常に自然が壊されていく。一方松村先生のお話にあったテニスボールを捨ててしまうということを敷衍して考えていきますと、東京の安売りスキー用品店でばんばんプラスチックのスキーが売られているわけです。自然を壊しているところでスキーをやり、そしてなおかつ使ったスキーの板がリサイクルプロセスに乗っているかどうか分からない。空き缶と同じようなものです。あれは最後にどこに捨てるのでしょうか。

そういうような状況で私たちが子供たちや生徒にスポーツを教えてきていたわけなのです。それでブルークボーゲンがどうなの、曲がる時は山側に体重をかける、などということに専念してきたと思うのです。これからの体育者の役割として、そういうような状況で全く無邪気にイノセントにスポーツを楽しんでいるだけでいいのだろうか、技術的な問題を教えることに集中しているだけでいいのだろうか、という疑問を先ほどのお話をうかがいながら感じたのですけれども、そのへんの問題はというふうにお考えですか。

○松村：常日頃考えるのですけれども、どうも自分のおかれた場がそうであるし、非常に辛いところなのです。自分で実践もしております。やはり先ほどもいいましたけれども、何かシステムとして特定のスポーツにどんどん集中していくという傾向は社会学者としてきちんとみななければいけないと思うのです。教育の現場でどうするのかといったときに、すぐにそんなスキーはナンセンスだからやめましょうということではないと思うのです。

僕は有機農業などにも関心があるのですけれども、欧米でもエンバイロメンタリストはものすごいエリート主義で過激なところがあります。彼らは非常に頑固で妥協を知らない人たちで、そうい

うことで自分たちの格をあげていくという点も考えることが必要です。こともございます。

教育の現場で、「激突政治」と社会運動論ではいいすけれども、それで物事が変わるとは私は考えていません。やはり現場の人たちで練っていった、スポーツの研究者も一緒に現場で考えていくしかないのです。一步一步どうしたらいいのだろうか、この種目はどうなんだろうかというような討議をしながら、あるいは先程いったように、「何か馴染まないな」という景観の破壊の問題とかそういうものから、スポーツとの関わり合いを考えていくというふうに私は考えていこうと思っています。すぐに解決にはなりませんけれども、そういうわけです。

○司会：実際に我々はどうしなくてはいけないのでしょうか、というような問題についても後でご指導いただきたいと思います。それではどうもありがとうございます。

では次に、今度は実際の現場を運営なさっている立場から緑営グループ会長の吉崎満雄様にお話を伺いたいと思います。

スポーツと環境の共存、 そしてスポーツを通しての環境教育 ——スポーツ企業の実践例——

吉 崎 満 雄

ただ今ご紹介いただきましたように、ゴルフ場の経営を本業としている会社、緑営グループの会長をやっております吉崎と申します。自己紹介をさせていただきますと、私は昭和30年に三重大学の農学部を卒業しまして、以来一筋にゴルフ場勤めをやっているという経歴でございます。私の先生のさらに先生が明治神宮や新宿御苑を設計なさった造園学の大変な長老ということで、私自身は農村社会学とか農民心理学とか、農業経営経済とかいうことを専攻したのですが、卒業してから急遽変更させられまして、以来40年近くそういう仕事に携わっているということでございます。

昭和30年といえますと、ゴルフ場がほとんどな

いいと思いますか、30幾つぐらいしかなかった時代なのです。おまえゴルフ場見たことあるかという先生の質問に、ゴルフってなんですかという質問をして笑われたことを覚えています。そうしたらその先生は俺が設計した新宿御苑へ連れていこうということで、その新宿御苑に連れていって、あの広い芝生のところへいってゴルフというのはこういうところで玉を打つスポーツなのだよということで、私も納得しました。皆様方がご存じの新宿御苑のようなゴルフ場というのが、私のゴルフに対する最初の出会いだだったというふうに申し上げたいと思います。

今まさにゴルフというものがあらゆる業界で俎上に乗りまして、賛成反対いろいろ議論が出ている時代でございますが、世界的にみますとゴルフ場というのは大変問題を抱えながらも増えております。それが証拠にお手元に差し上げましたように、1996年度アメリカのアトランタオリンピックには、ゴルフが99パーセント決定とっています。正式種目として、マスターズトーナメントというゴルフをやっているオーガスタショナルゴルフクラブで、正式種目として金メダルを争うということになりました。これが世界的なゴルフの隆盛を物語っているのではないかと考えています。

最近私どもの日本の国でどれぐらいのゴルフ人口がいるかということ調査した結果が出ました。皆様方のお手元にその資料を差し上げてありますが、ちょっと一番最終の平成4年度ジュニアゴルフ教室の開催結果報告一覧表という資料4というところでこういうものがあります。これは非常に権威のある調査でありまして、5年に1回総務庁の統計局が調査するもので、15歳以上の男女青年に対して、年に1回以上ゴルフをやった人は丸をしてくださいということから、調べたら、その結果現在の日本のゴルフ人口というのは15歳以上で1,782万人、15歳以下のジュニアをいれますと、2,000万人にきわめて近い数字がゴルフに馴染んでいるのではないのだろうかということです。これにもぎっと斜めに見ていただきますと分かるとおり、非常に20代、30代の若い人、それに女性

が非常に増えました。5年前と比べてなんと60パーセントも増えたという結果が報告されています。

それを受けて立つゴルフ場の施設も、非常に厳しい批判の中でのゴルフ場の建設ですが、不景気の中でもじりじりと増えました。おそらく来年は2,000ヶ所、1ヶ所平均だいたい80ヘクタールから90ヘクタールということをやっと切り上げて1ヶ所100ヘクタールくらいということになりますと、20万ヘクタールくらいの面積がゴルフ場として使われているのではないかというふうにいえます。ゴルフ場が20万ヘクタールあるというのはちょっと注釈が必要でございます。

ゴルフ場の芝生の面積と、森林といいますか、林地の面積をわけて考えた方が分かりやすいのではないかと思います。最初に私は新宿御苑の話をしてしましたが、新宿御苑の芝生の面積と森林率というのは何パーセントぐらいだろうかというふうに考えてみるのも、一つの理解度を高める方法かと思えます。だいたい今から15年か20年くらい前までは、ゴルフ場の森林率というのは非常に少なかったのです。だいたい30パーセントぐらいがいいところではないかと考えています。それから35パーセント、規制がだんだんできまして、40から50パーセント、最近では60パーセントという数字にまで上がってきています。60パーセントとなりますと、日本の国土に占める林地と極めて近くなってきたということも申せます。ここに括弧で描いておきましたように、日本の国土に占める林地率というのは現在進行形でどんどん減っていますが、だいたい67から68パーセントぐらいです。減らした主たるものは皆さんの住宅団地、あるいは工場団地、その他の施設というものが林地率はほとんど0ですから、極端に減らしているというふうにいえます。

ちなみにアメリカあたりの自然保護団体がなかなか厳しいところでも、33か34パーセントぐらいの林地しか残っていないのです。日本は戦前は80パーセント以上林地があったのですが、戦後40年、開発に次ぐ開発でこういう数字になったというふうにいえるかと思います。

ゴルフ場の環境というものを、現在は以前より良くしようということで、行政も業者も非常に努力をしているということがいえます。皆様方は「ビオトープ思想」ということをお聞きになったかと思うのですが、これはドイツで発生した考え方で、破壊してしまったものはしょうがない、但し今後はまた直せるものなら全て以前よりいい自然の生態を取り戻すように直そうではないか、ということの思想でございます。行政も民間もそれまでコンクリートで固めてあったような河川の両壁のようなものを壊して自然の石を入れたり、また農村では畑というのは広大な破壊です、それに木を植えていこう、道路もコンクリートで固めたような道路は駄目で、もっと地下水が地下に入るようにしようではないかというような、ダムの護岸まで含めましてやろうのではないかという思想を「ビオトープ思想」と称して、最近に到って日本でも紹介されてきているわけです。

そういうことがゴルフ場の開発の規制に影響を及ぼしました。ここに書いておきました。現在のゴルフ場の開発認可を受けるための条件は、まずその浄化槽は必須施設ということでその生活水全てをゴルフ場の場内で処理しなさい。絶対に場外河川には排水しないでくれ。今いった浄化槽の廃水の処理の生物化学的(BOD)な数字としての許容量は10 ppm以下だ。ちなみに埼玉県等の最近における工場団地も90 ppmで許しているのです。今までは180 ppmだったのです。家庭からでる生活廃水というのはだいたい最低300、300なんていうきれいな水を流す家庭はありません。大体1,000前後だというくらいです。これと比べていただければ分かるようにゴルフ場の浄化槽の性能というのは相当厳しい状況下におかれています。

またゴルフ場内に池を作ってそこに毒性に弱い魚を飼いなさい。「めだか」などの類のものです。それでそれが浮き上がるようなことでは駄目だ。中性洗剤を使いますと「みずすまし」がみんな沈んでしまいますからすぐ分かってしまうわけです。そういう池を作りなさい。そういったもので監視しようではないかということもやっております。

もちろん池の周辺は狸が水を飲みにくる、あるいは狐が水を飲みにきて落ちてはい上られるようにしなさい。自然の石をなるべく使ってそういうふうにしなさいという、すでに私どもも率先してやっていることです。

4番目はさらにそれでも隠れて農薬を使うのではないかということに対する未然の防止ということで、谷筋には、自然の谷筋が残っているわけですが、そこで県によって違いますが、年に春夏秋冬4回取るところや、春と秋の2回、あるいは突然来て取水しまして、これを検査料金はゴルフ場持ちで水質検査をするというような協定を結ぶことが義務づけられています。地域社会にそういう表流水も地下水も汚染させない。

5番目は天然の水路を貯留した池を作り山水を入れようとする。地下水の汲み上げをほとんど0にしようではないか。雨が降ったやつを全部貯めてしまおう。ゴルフ場は広いですから谷が5つも10もあるようなところがあるので、そういうところになるべく貯まるようにしようということをやっております。放任の谷は今やゴルフ場にはないのです。谷筋は全てなんらかの格好で、県によって違いますがアースダム、あるいはコンクリートダムで全部締め切って、最近史上初とか、史上5番目というような集中豪雨に対処している。下流にそういう突発的な土石流が流れないようにしています。我々からすればそんなもの流れるはずがないよということをいっているのですが、一応そういう安心感を下流住民に与えている。

植林とか植樹も、日本にもそういう緑の日というものがございまして植樹をなるべく推進していますが、ゴルフ場あたりもそういうのは率先してやっています。先ほどいいましたように60パーセントなら60パーセントまで残地森林がない場合は森林を造成しなさいということです。どういう木を植えるか、木でも灌木もあれば喬木もありますが、すべて喬木になるような木を植えなさいということで、そういう樹種の選定、規制をしています。

その他下流農民のために農業用水をすべて供給

してほしい。少なくとも森林を伐って天然の供給水を少なくしたのだから、それをカバーしてほしいということで農業用水は1ヘクタールあたり600トンの水を常に貯めておきなさいということです。

このほか最近のゴルフ場ではゴルフ場を娯楽施設とするか、スポーツ施設とするかで議論があったのですが、最近はその中間だろうということで、娯楽施設利用税はなくなりまして、代わりにゴルフ利用税というものがかかってきました。スポーツ施設に利用税というのはいまだに私たちは納得いかないのですが、1人あたり900円から1,200円くらい高いところは1,400円くらい払いまして、これはお客様からいただきまして払っています。ゴルフ場が徴収義務者です。それは県税と市町村税になるわけです。その税金の70パーセントが市町村に返還されるということです。

最近のゴルフの位置づけとか事情というのはざっとこういうところがポイントであろうかと思えます。

次に自然環境問題の取り組みということでお話ししたいと思います。これはすべて実情に沿った線で皆さんにご報告したいと思います。先ほどもいいましたように、自然環境問題の取り組みというのは人からいわれたからやろうとか、新聞に書き立てられるとか、反対運動者がうるさいからというようなことで私どもでは取り組んでいるわけではないのです。新宿御苑のようなゴルフ場だったらいいなというところが原点ですから、それから出発しまして、私のゴルフ場の取り組みというのは始まっているわけです。

具体的に申し上げますと、私どもが平成2年の1月に無農薬管理を宣言したのです。新聞等で広告費1億2,000万円ほどかけました。朝日新聞を始め全ての日刊紙、ほとんど有名な週刊誌に全部無農薬宣言ということを宣言しました。自分で自分をいじめるような格好をして、後戻りしないぞということで無農薬管理を何があんでもやりましよう、重要な問題だからということでやったのです。そうしましたところ非常にあらゆる行政から反応がありまして、日本全国津々浦々から問い合

わせがありました。

その中で千葉県が県知事の目に止まりまして、民間の業者が無農薬管理やれるというのに、おまえたちはどうしてやらないのかということで農林技官を全て呼んで何があんでも千葉県では無農薬管理を全てのゴルフ場でやらせろという知事命令が出た。これが非常に話題になったのです。現在、日本広しといえども千葉県だけが県知事命令で無農薬管理、無農薬建設というものを業者に誓約書を出させて進行実施しているということでございます。

農薬というものの位置づけがはっきりしないのです。日本の国には農薬取締法というのがあります。そこに農薬とかと書いているのです。そういう位置づけがあります。そこで国の認定をしたものを農薬と称する、すなわち登録制が固まっております。農薬の方からいう農薬と、ゴルフ場の方からいう農薬というのは同一なのです。同一だけれども扱いが違います。

一般的な民間の反対運動者からいうと、農民のための農薬はOKです、ただしゴルフ場の農薬は、同じ物でも駄目だという位置づけで現在進んで来ているわけです。これくらい大きい矛盾はないと私は思うのですが、われわれはスポーツ企業としてのプライドがあるので、スポーツ施設としてのゴルフ場で農薬のために湿疹ができたとか、今のゴルフ場は深呼吸もできない、ゴルフ場の水は飲まない方がいいというようなことをいわれたら、こちらも片腹痛いということがあるわけです。一番大事なのはやはりそういう児童、乳幼児がきた場合に必ず芝生の上ではころげ回るわけです。そういうときにゴルフ場というのは農薬まみれだからころげ回っては危ない、あるいは山形で反対運動者にいわれたのは、ゴルフ場の脇を迂回して児童を通学させる。何故ですか、私は分かりませんと聞いたら、ゴルフ場から毒ガスがでるのだ。それをNHKがいったという話まで出たわけです。私もはじめは何のことかさっぱり分からなかったのですが、田圃のヘリコプターで撒く農薬、長い管で粉を撒く、そういうのを見てそれと一緒に

だと思っていったらしいのです。その先生方はゴルフ場は見たことがなかったと後でいいました。私と大議論になったのです。

農薬という国が認定して厚生省、あるいは農林省全てが認定している薬をどう位置づけたいのかということがいまだに分かりません。いずれにしても農薬というのは催奇性、あるいは発ガン性、難病のきっかけになる、元気な人の健康を害する危険性の側面があるとするのなら、我々スポーツ企業はそういう物を使わない方がいいではないかということで私は今まで進めてきましたし、今後もこれを守っていかなければいけない。

私どもが無農薬宣言をしてから世の中が変わったといわざるを得ません。減農薬管理、超減農薬管理、それに裏付けとなるいろいろな資材がものすごい勢いで増えてきたのです。非常に面白い話なのですが、今年発表されたある資材は私どもが一番マークしている殺虫剤です。ちなみに農薬というものを取り上げた場合殺虫剤、殺菌剤、除草剤と三つを頭に入れていただきたいのです。その中で動物を殺す殺虫剤というのは一番人間に害を及ぼすだろうというのが私の考えなのです。その殺虫剤で今年のはついにある企業が従来の農薬会社が作っている殺虫剤よりもよほど効果のある資材を作った。農薬会社は困ってしまって、厚生省と農林省に、裏から疑問あり、そんなに効くはずがない。どうしても調べろ、といって調べた結果これは全くある食品の組合せだったということが解かって、これには農薬会社が困ってしまった。3,000倍から5,000倍位まで薄めたのです。そういうにんにくとか唐辛子とかそういうものを組み合わせたらとんでもないすばらしいものができたわけですから。そういうことで非常に世の中が変わってきたなという感じを実感しています。

これは前提としまして、私はいま農業問題の農薬を論じているのではないのです。それと別にしないと延々と議論が空回りしていつてしまいます。たとえばポストハーベストの問題などでどうしたらいいのかということ、私個人が大問題だと思っていますけれどもここではそういうことを避け

て通っていきたいと思います。「ゴルフ場の農薬」という問題だけでいきたいと思います。

現在どういうふうにそういう殺菌剤を人間に害するであろうという恐れのある農薬を放逐しているかという具体例です。和漢生薬の利用と、海水の粉、海水そのもの、温泉水、こういう物がゴルフ場の病気というのは動物系のバクテリア系の病気と、菌糸、植物系といいますが、その中間の茸類の二つの物があるわけです。そういう物に対しては温泉水も利用できる、湯の花のようなもの。食用酢、私どもでは黒酢をずいぶん使います、そういう酢酸系の物、あるいは最近テレビに出てますけれども、くん炭や木炭をつくるときにでる木酢液というようなものを使います。

殺菌剤を使わなければいけないような病気が発生しないためにはどうするかというと、海草肥料とか堆肥とかそういうミネラル、ミネラルのいちばんいいのは海水の粉なのですが、それから木炭、くん炭というようなものを使って、人間と一緒にすから病気のでない芝をつくるのが、根本的に非常に殺菌剤を要らなくさせるものになっております。

次に殺虫剤の放逐のために実施していることは、海草のエキスを非常に昆虫類がいやがる作用があるということで、これを撒いて虫がこないようにする。昆虫全部を殺してしまうと大変なのです。今度は自然の生態を破壊することになるのです。鳥類の餌がなくなってしまう。とにかくプレイングゾーンだけこなければいいのですから、そこだけ嫌がらせば虫はこない。これは一番いいことですから私どもはこれを多用しています。

最近、粉石鹼というのは家庭のてんぷらの廃油が1,800から2,000くらいBODがあるということが分かって来ましたので、回収して粉石鹼を作っているというニュースが流れています。もとは油と苛性ソーダでつくった粉石鹼、そういう物を利用している。

和漢生薬の利用。ある種の植物の組合せで、恐ろしいもの出来上ってくるということがいえます。人間を殺した「とりかぶと」というのがあります

が、あれも野鼠に対しては非常に効果があるので。神経性の麻痺剤です。

そのほかに野鳥による害虫、毛虫退治の促進。そのために巣箱を18ホールあたり210個ぐらい取り付けています。野鳥というのは非常にダニが多いものですから、年に1回巣箱を掃除してあげなければいけないのですが、そういうことや小鳥の棲息環境を以前よりよいように回復するためには、「小鳥の池」というものを作ります。小鳥というのは沢山餌を食べて、カロリーを猛烈に吸収しないとはたばたするのにもものすごいエネルギーを使うのですが、そのために体を冷やす必要があるということで水浴びを1日2、3回やるのです。そのための池も作っておかないといけない。そういう四十雀とかの類の物は、我々が調べたものではないのですけれども、その方面の本によりますと、年に8万から12万匹も毛虫類を食べる。これはここに害虫と書いてありますが、害虫というのは勝手に人間がつけた言葉でございまして、はたして小鳥が害虫と益虫と選り好みして食べるというものではない、益虫の幼虫も食べているであろうというふうに考えなければいけないと思います。

今の人間は蜂に刺されてもすぐ死ぬような柔な人間になっていますので、毛虫などは全然駄目なのです。そういうことで薬剤を使わないで鳥に食べてもらうのが一番いい方法ではないでしょうかということで進めております。これも資料がお手元に差し上げていると思いますが、珍しいということで新聞にも、「野鳥の会」の会員の指導でやっているという紹介のものをつけておきました。私どもの現在そういう鳥の巣の数は14コースで全部で3,067個つけてあります。小鳥の巣穴が30ミリの小鳥用のものと、50ミリの大きいもの、大きいものというのはふくろうとか赤啄木鳥とか黒啄木鳥用です。小さいものはだいたい30ミリから32ミリの穴を開けています。現在その巣を利用してくれる率は、だいたい80から85パーセントです。小鳥も住宅難のようですぐ移住するのです。その中で子供を育てて巣立ったのは、52パーセントということです。非常に興味のある人は野鳥巣箱調査報告

書という学術書がありますので、後からみていただければ分かります。これはそういう学術発表ができるような調査をしてみました。

それによってどんどん前よりもよい環境で野鳥が育っている。たとえば猛禽類というものはどうしたらいいか。野犬とか猫に取られないためにはどういう高さに巣をつけたらいいか、どちらの方向からはいったら小鳥の羽が痛まないで巣には入れるか、そういうことまで非常に勉強になりました。現在進行形でそういう問題は進めています。

それから殺菌剤を放逐するために、もう一つ問題があります。それは「とんぼ類」を多くすることなのです。これは蚊やぶよや蜂などの小型の我々からいうと害虫を食べてくれるのがいないとなかなか無農薬というのは完成しないのです。今まではどうしたかということ、池の中の生物を全部殺してきたということがいえます。そういうことでとんぼ池を作る。優秀なとんぼ池になりますと、とんぼの専門家にいわせると、日本の千葉県あたりでも40種類くらいのとんぼが集まってくるのだということで、わざわざそういう谷間の水田をとんぼ池にしてあります。とんぼ池とはなんだといいますと、羽化のためにはい上がっていくところが必要ということで、「がま」などの葦類をすべて残し、「やご」の餌になるような他の水生昆虫が棲息するような状態を保つ、そういうのが「とんぼ池」です。殺虫剤を使わないという限りはこういうことが必要になってきました。その通りにやっています。

最後に除草剤ですが、除草剤というのは私どもからみると雑草も生えないようなところは芝生も育たない。そんなところに人間が住むのが悪いのだということになってしまうのです。雑草が生えるが故に農作物もできるし、芝生もできるのだということです。ここがいちばん日本人の短所なところだと思うのですが、単一民族か知りませんが、芝だったら芝だけにしてくれ、雑草は嫌だということです。雑草を生えさせると会員権が安くなるぞと脅かされます。やむを得なく除草剤をかけないで雑草を抑制しなければいけないというのがスポ

ーツ企業にとって頭の痛いところです。そういうところは雑草の弱みというものをつかめばいいのです。弱いのが何かといいますと、雑草類というのは乾燥に弱いということが分かりました。乾燥化さえしておけば草の種はほとんど発芽しない。雑草というのは永年性宿根性雑草というのは少なく、ほとんど一年草の雑草で、種子も雑草の弱みの一つだと思うのですが種子が発芽しない限りは雑草はなくなるわけです。そういう方向に現在は急がば回れで、廃水の悪いホールは全部排水をよくして手入れをしています。そうしますと確実に雑草の個体は毎年どんどん減っていきます。

昔に戻るようで大変なのですが、来場者のお客様にも、一定の日を決めまして、午前中1回、午後1回3分間の「除草タイム」というのを設けまして、そういう思想を取り入れて、皆さんに手でもってもらっている。後は従業員が手でとるという状態で、雑草だけは今のところ除草剤に代わる人間に無害の薬剤というのは、現在進行形で研究が進んでますが、今のところは使えないという状態です。

ただ一つ氷酢酸という酢を作る素があります。その酢酸は薄めれば三杯酢にもなりますが、濃いやつは雑草を抑制し、あるいは葉を枯らすという作用が解かってきていますので、そういう方向からも現在研究しているとご報告したいと思います。

自然環境というものをさらに配慮するためにはどうしたらいいかと考えまして、いちばん最後のこれに手をつけると大変だと思うのですが、「化学の肥料」です。化学肥料を減らそうではないか。皆さんにも関心の強い人が多くいらっしゃると思うのですが、硝酸系の肥料、窒素系の肥料というのは、硝酸体窒素になって芝生に吸収されるのですが、それがそのままですと発ガン性の物質に代わる。実際は一万倍も十万倍も増やさないとそういうふうにならないと思うのですが、そうおっしゃっているのですから、有機肥料化を図るようパイロットでやっています。どういうことをやろうかといいますと、芝生の刈屑、落葉、雑草、食堂から出る残飯類をすべて堆肥にする、サイク

ルをつくろうということです。ある種の酵素やバクテリアを加えますと、いい有機堆肥になるということが分かってきています。そしてなるべく化学肥料を減らしていこうというのです。

わが国は資本主義国家で巨大な財閥系の化学会社が業界を牛耳っています。また1部上場の農薬会社、人間の薬品を作っている巨大な薬品会社、みんな農薬を作っているのです。そういうものに私ごととき小さい企業がドンキホーテのように突っ込んでいって、どれほどの効果があるか知りません。分かりませんが、そういう技術というものができるのだということを世間の人が知れば何かの役に立つのではないだろうかということはいえます。

その他いくつかあげますと、谷の埋め立ての回避です。谷筋というのはあらゆる生物の、野生生物その他昆虫も含めて大事なところだと生態学からいったらいえると思うのです。植物にしても動物にしても。そこを全部埋め立ててしまっただけでも子もなくなってしまうということで、ほとんど谷筋は埋めないようにしよう。お金もかかるのですが、迂回方式で橋をかけたりして自然をそのまま残そう、それが一番いいということをやっています。

当り前のようですが、渡り鳥は鳥獣保護区にしなければいけない。密漁者が多いので、せっかく渡ってきた鴨や鴛鴦を夜中にきて密漁しています。そのくらいゴルフ場の池にはたくさんくるのです。そういうもののために法的規制をかけてしまおうということをやっています。そういう池には無農薬管理ですから、あらゆる水中生物、魚、昆虫、そういうものを豊富にして水鳥の餌が枯渇しないようにしようということで努力しています。

第3番目にゴルフ場と人間環境ということでお話ししたいと思います。まず第1はゴルフ場の開放ということです。これは皆様のお手元にありますが、地元開放日来場者数一覧表ということで丸1年間の実績をそのままお持ちしました。地元開放日実施13コース、総合計118回行いました。16,492名、これはだいたい40組160人を一日の上限として制限しておりますので、黙っていますと300人でも

400人でもいらっしゃるのですがそういうことでは問題なので上限を160名とした上での数字というふうに見ていただきたいと思います。

思い切って地域社会とゴルフ場というものの実態を見ていただくのが、何よりわれわれを理解していただけるのではないかとということからこういうことを始めました。定例になる料金というのが入場料を11,000から13,000円ぐらい安くして開放しているのです。その運営は役場に頼もう、我々がやっていると、またいろいろな目でみられ批判の対象になるからということで、ここにも書いておきましたが教育委員会、体育課、社会教育課というような系統の課が担当していただいて、公平にやる。抽選でやっているところ、朝順番で並んでやっているところ、いろいろあります。ある市では朝の3時半ごろから並んでいるとなっていて、40組では足りないということをいわれているのです。そういうところは今年はさらにシーズンによってはもう10組くらい増やそうかということも話題になっています。

そういうことでこの日はそのほかに家族もきていただきたい。とにかくゴルフ場を開放するので、クラブハウスも、コース管理事務所も、農薬倉庫もすべて見て行ってほしい。農薬を使っているが、使っていないといっても使っているだろう、夜中に使っているだろうという人もいます。困ってしまうのです。どうぞ見ていてくれということなのです。すべて見てほしい。どんなお子さんでも連れて来てもらって結構だ。同伴プレーもOKです。同伴プレーは認めないのが普通なのですが、OKです。全てを月に1回ささやかですけれども、開放してどういうふうになるだろうかということをして1年間続けてこういう結果が出ました。

土地は売ったけれどということで70、80歳のおばあさんおじいちゃんが見てゴルフ場とはこういうところかということで、興味津々としていらっしゃる姿が、私たちとしては良かったなという感じは受けます。

もう一つ無農薬と関連して、小鳥が多くなった

からバードウォッチングをやろうということでもとりまして、やってみたのです。これは小鳥よりも人間の数が多く、参加者が多くてなかなかバードウォッチングにならない。参加人員を絞ってやらないと、がやがやして鳥がみんな逃げていってしまう。音はみんな人間の声に代わってしまうという状態です。ここに資料で新聞等で取り上げたものをつけてみましたが、実際もう少し常にやるには工夫が必要だという結果でした。

今後もこういう広大な土地を占拠しているわけですから、先ほどの話にもありましたが、今の日本の森林とか林地という問題は何かといいますと、手入れをしていない放置林です。これは大問題、国力低下の最たるものだとは私はいつているわけです。そういう点ゴルフ場の森林というのはまあまあ手入れしているから、手入れをした森林をいかに利用するか。余計なことですけども林地の中をフィールドやトラックに見立てた、環境スポーツと呼べるものが考えられるのではないかとことです。極端な話からしますと、今のアウトドアスポーツというものはほとんどそういう点では環境破壊の上に立っているといつて過言ではないのではないかと思います。逆に環境を読み込んだ新しいスポーツが新世紀に必要なになってくるのではないかと考えられます。

次にジュニアゴルフ教室。スポーツとしてのゴルフの特色の一つにそのルールのユニークさというのがあるのです。世界共通のルールを持っているわけですが、そのルールの前文とか第1章というのはエチケットマナーが書いてあるのです。

スポーツマンシップ養成にもなるということで考えまして、ゴルフの本来の姿というのは自然とコースと自分と相手のあるがままの状態、そういう4者との闘いということがゴルフの原点です。監督もコーチもレフリーもいない選手に全部一任されているというスポーツの特色があります。それをジュニアに普及していく必要がある。商業ゴルフでは駄目だということで始めました。まだまだ軌道に乗らないのですが、現在のジュニアゴルフ教室開催の結果報告一覧表というのがお手元に

あると思います。この程度をやっていましたが千葉県の小見川の中学の校長先生から評価され、感謝状を頂戴してゴルフ場の方がびっくりしてしまいました。

ゴルフというものの閉鎖性、貴族性を打破していかうということです。もちろん無料でやるのであれば効果がないということで現在もやっているのです。そのカリキュラムですが部数が足りないで目録だけ皆さんのお手元に差し上げましたが、だいたい12回を1つの目安にしまして、1日について2時間です。何も難しい格好とか用具はいっさい要らない。体育の時間に着るウェアで結構。スニーカーで結構ということで、ゴルフは高価だということではなく、いっさい負担の無いようにしまして出発しました。こういう指導マニュアルという小冊子を作りまして、これに添ってやっています。部数が少ないので後からもしご興味のある人は、先生の方に8から9部ありますのお持ちください。

ゴルフ教室をやりまして、子供の目でみた正直なゴルフ場の姿を友達や親兄弟に話してもらえれば、ややもすると色眼鏡で見られがちなゴルフ場というものも正確に伝わっていくのではないかという期待も込めてやっております。

以上が私どものスポーツ企業として現在実施していることとお話申し上げました。大変ご静聴ありがとうございます。

体育学会体育心理学シンポジウム発表レジュメ抄録

スポーツと環境と摩擦の反省の上に

—「スポーツと環境(問題)」の社会学をめざして—

松村和則 (筑波大学・体育科学系)

はじめに

環境問題：オゾンホール／温暖化 (→ CO₂ 問題)／
酸性雨／砂漠化／5大湖の汚染 ETC.
水俣病／イタイイタイ病／穴道湖の水門／コメ問題…ETC.
ゴルフ場問題／スキー場開発…ETC.

市場そしてそれにともなう大量消費は、新たなパースペクティブから、自然に依存しているものとしてみなす必要がある。チェルノービルは、いつか我々の古典的な産業社会の終焉を人類が確認した日としてみなされるやもしれない。こうしたリスクは次世代に残されるもの。こうした危険はそれを作り出した人々に復讐する。危険は誰にも平等に広がってしまう。

(P258)

近代化にまつわる(環境)危機の最大の特徴はその地球的規模にひろがる点にある。こうしたグローバルな側面—普遍性と不可視性—は、我々の「小宇宙」でのこうした危機によって我々が脅かされていると感じるのを稀なものにしてしまう。…このような側面は安心をのもたらし、問題の隠蔽に貢献する。…現在の危機は、どちらかといえば抽象的な現象であり、言葉と議論を通してようやく経験できるものであるという事実によって助長される。(P261～2)【Helmut Digel: Sport in a Risk Society (IRSS 1992 vol.27.3.)】

「公害は国債に似ている。一つ一つの事例が許容限度内だと思っているうちに、マイナスが累積してくる。その時になってからでは責任者を指定することも難しい。そして次ぎの世代に付けが回される。」P92-3

「現実には生きている倫理は、相互性の倫理と世代間倫理とが補完し合って成り立っている。… 伝統の支配と進歩主義とが生きた対立関係を演じている間は世代間倫理の不在が露呈しなかった。」P97

【加藤尚武「公害倫理の世代問題」『バイオエシックスとはなにか』未来社 1986】

H・ヨナス「責任の原理 Ethics of Responsibility」

地球規模の問題／抽象的な危機



実践のコストを考えて環境問題から撤退してしまう。
危機が記号として消費されてしまう。

1 日本におけるスポーツ社会学の社会学

—何故スポーツ科学が「環境問題」に弱いのか—

◇「環境」と「身体」を捉えることに不得手な社会

学

- ◇P・ブルデュー（『構造と実践』藤原書店1991）
「スポーツ社会学者はいわば二重に被支配的である」
「社会学者からは侮られ、スポーツ関係者からは軽蔑される」
体育の世界の潜在構造 「理論派」と「実技派」
の対立構造（身体性／卓越性の問題）
- ◇スポーツを独立した領域として設定し、親学問の最先端の成果を適用することに腐心した。
- ◇「スポーツ振興」のイデオロギーに強く縛られる。
- スポーツが想像以上の力を持ち、自然を破壊することを自覚しなくなる。



- ◇我々体育研究者／指導者の気づかない「身体性」が研究を狭くしている。
「環境」のもつ政治性とエリート性を嫌悪する感情が働く（実践性／言語能力至上主義）
アイザック・ウェルトン連盟（350万人会員1975年）
（1922年スポーツ・釣・水質に関心ある人々によって設立）
→シエラクラブの様な闘争的な自然保護の立場に好意的ではない。
『環境・エネルギー・社会』P167

2 日本のスポーツと環境問題

- ◇「スポーツの時代」→スポーツ産業の隆盛
特定のスポーツに偏る（スポーツの世界のモノカルチャー化）するスポーツの隆盛そのものは内需拡大、GNP増大に寄与しない
- ◇巨大な施設を必要とするスポーツが流行る
→ゴルフ・スキー
P・ブルデュー：流行らせるのは誰か？、誰の利益となるのか？
- ◇メディアが主導権を握るスポーツが隆盛
マラソン・駅伝・プロ野球・甲子園野球・相撲（作られるヒーロー達）



「現物」感覚の不在 テクノロジーに支配されたスポーツ
身体技術化と環境への無配慮は根底でつながっている

過剰なスポーツ需要を作り出す。「構造」



現物（モノ）の（スポーツ）社会学へ
事例研究は一般理論を実証するためのものではない。
「理論」との距離を測る。

3 山村の崩壊とスキー場の開発

- ◇「時短」をせまる外圧／内需拡大→総合保養地域整備法1987
- ◇レジャーの貧しさ→レジャー教育の必要性
- ◇若者に媚びたスポーツリゾートの開発
- ◇スポーツに向かう時の知識・態度の貧困さ
農業問題に翻弄されたゴルフ
ゴルフ場開発問題で明るみに出たこと→スポーツと環境問題

■スキー場開発の問題点

第一次産業を構造的に壊滅に追いやる戦後の「農政」
酪農振興の失敗→村の共有地をリゾート会社に売却（第3セクターは土地対策）
里山は人々の手が入って初めて維持される（もはや山に人はいない）
スキー（趣味）は、「卓越性」をもたらす→部落間、部落内で住民の分断化
スキー場開発の「効果」→都市的文化を「身」につける
（お嫁さんのいる部落、いない部落、年寄りの部落、離婚の多い部落。）
何故、こんな差が生まれるのだろうか？



「地域性」が開発に対しての人々の対応を左右する
地域で暮らす人々に視線が伸びない開発担当者／スキーヤー

着実に汚れていく水
死んでいく土
失われる景観

市町村行政の枠の中でスポーツによる開発を考える人々

環境基準値の設定は汚れを容認する→「汚れ」は社会関係（中村尚司）

まとめにかえて

◇スポーツと環境（問題）の関わりを追求する

→学問の馬塞を飛び越える勇氣

科学を科学で乗り越えるしかない！ことも自覚して

◇研究の抽象度を上げない努力も必要となる。（一般性・普遍性を犠牲にしても）

◇スポーツがパワーをもった「現代の研究」

（現実的な力となるのは「経済」「政治」との関係）

→階級・権力を位置付ける

◇スポーツの持つ象徴力／スポーツ・体育の「身体」形成力を識る

→スポーツを生産するのは誰かを考える

◇個性をもった「場所」を創りだす実践を伴ったスポーツ・レジャーの研究・教育緩やかな「運動」の実践としての〈スポーツと環境〉の社会学→「循環の論理」

↓

新しいスポーツ・体育の創造・再生産のシステムの開発

体育の再考

↓

野外運動・自然教育の位置付けを再考

○司会：どうもありがとうございました。吉崎さんの方から、最後のほうに我々にとって耳の痛いお言葉がありました。今までのスポーツ活動、特に野外スポーツ活動というのは自然を楽しむための消費の対象としてみてきたのではないかな。これからの時代というのは我々は自然を作りながら、

あるいは自然と一緒に生きながらやっていくスポーツが必要なのではないかというご指摘もありました。お話を伺っていますと、吉崎さんのゴルフ場のような運営を我々が学校のスポーツ施設、あるいは学校のキャンパス全体にやっていったら自ずと環境に対して、アウェアネスの高い、意識の高い子供たちが育っていくのではないかな。我々のスポーツの指導、スポーツの営みの中で環境に対して意識を高めていくことができるのではないかな、というようなことを考えながらお話を聞かせていただきました、どうもありがとうございます。

それではフロアーの皆様からご質問、ご意見を伺いたいと思いますが、これは録音していますので、後で会報に紹介したいので、お名前所属をおっしゃってからご質問をお願いします。

○原田（北海道教育大学）：吉崎さんにゴルフ場の今新しい経営の仕方をご報告いただき、大変すばらしいことだと思うのですが、北海道で考えてみるとゴルフ場は農業の問題が非常にクローズアップされますけれども、二次的な問題に過ぎないのではないかという実感を非常にいただいています。というのは数の問題だと思うのです。僕は外から見ると、ゴルフ場をこれから作ると、増やしていくと、どんどん作られているのです、このことに関してゴルフの業界の中でどのような論理でやられているのか、規制をするのなら、どのような規制をしようとしているのかについてご質問したいと思います。

○吉崎：私は行政の人間ではございませんので、全く100パーセント民間の考え方として、お話したいと思います。北海道というのは非常に広いわけで、そういう中でそういうご質問があるというのは興味があります。農業の問題につきましては、帯広市がパブリックゴルフ場を作りたいということで私どもに相談にきまして、絶対無農業でなければ駄目だということで市長さんに申し上げましたら、その通り無農業で作った、それが河川敷き

です。

世界の潮流として一番注目されるのは当然アメリカなのです。アメリカはご存じの通り約2億5,400万人くらいの人口で、13,000コースぐらいあるのです。それでいきますと、一つのコースに占める人口からいきますと、16,000, 7,000人くらいいきます。

○司会：人口が日本の倍で、ゴルフ場を10倍もっている。

○吉崎：10倍までいかないのですが、日本は今年で1,800ぐらいです。ですから国土が25倍あります。ただアメリカはゴルフ場を作れ作れといっているのは、ものすごい勢いで砂漠開発をしているのです。日本の場合とそこが違うのです。低利の金利を融資してゴルフ場を作るのです。ゴルフ場の緑化効果というものを非常に高くかっている国です。わざわざ砂漠のまん中にゴルフ場を作るのを奨励しているのです。日本の場合はそうではないのです。

私自身の考えとして、だいたい50,000人に1つのゴルフ場があれば日本人の収入とかを考えまして充分ではないかと思います。今1億2,300万人の倍にして10分の1にすれば2,400, 2,500くらい、それ以上作らない方がいいのではないかと思います。ただこういうオリンピックの種目になってみたり、ゴルフ場の人口は押えれば押えるほど増えてくる変な現象になってきているのです。私どもの想定よりも増え方が多いし、ゴルフに夢中になる人が多くなってきている。若年化、また、リタイアしないで長生きしているから死ぬまでゴルフをやるぞということで、先ほどお渡しした統計は如実に物語っている。だいたいそんなものだと思います。

○司会：ゴルフ場というと18ホールで7,000ヤード無ければいけないという考えがあるのですが、必ずしもすべての人がそうではないので、もっと短いホールで、自転車で行けるところにコースができてくるという可能性はございますか。

○吉崎：いま、いいお話だと思うのです。日本人の癖というのはチャンピオンコースというのを望むのです。これは全く間違いだと思います。世界のゴルフの名門コースのランクベスト10などは、ほとんどそういうコースではないのです。何で7,000以上がいいのかなと、私は設計をやっていますけれども分からないです。私は最近6,500ヤード前後のコースしか作らないことにしました。フェアウエーの幅も狭くして、あと全部林ということで、真っ向からスポーツ企業の、沢山飛ぶ、即ボールも飛ぶよ、クラブも飛ぶよというようなことの正反対の要求をしよう。飛ばなくてもいいから正確に打てと。1打300ヤードなんてスポーツ誌があおっているのがどうもおかしいと思うのです。環境とそれは相反する結果をコースに求めています。

○中島(東北大学)：私も松村先生と同じで、社会学をやっていますので松村先生の発想にきわめて近いのですが、そういう立場からあえて松村先生に水を向けたいのです。今日議論されていましたが、環境という言葉をお二人で使っておられますが、その内実は違うと思って聞いておりました。吉崎さんの場合は、お話の重点が自然環境だったと思いますし、松村先生が意識されている環境というのはおそらく社会環境、生活環境であってより広いというか好対照をなしていたというふうに思います。社会学ではすでに議論されていると思うのですが、生活環境主義というか、そういうものを意識したような説明を松村先生があえてされれば、この議論がもっとかみ合うのではないかと先ほどから思っていたものですから、あえてその点について、松村先生にご意見を求めたいと思います。

○松村：あまり社会学の中の議論はしたくなかったのですが、そういうものを踏まえつつも、触れませんでした。報告で少し述べたのですが、「スポーツの空間論」などでいわれるコートの中とか外とかいろいろ議論がありますが、非常に狭いところに陥ってしまっています。僕はどんどん外へ広がっ

ていって、スポーツを支えている側が、中島先生がいわれた社会環境みたいなところをもっと広げれば、情報環境とか文化的な側面とかそういうものまでも、スポーツ社会学でどんどんやっていかなければいけない。それにはまずスポーツのセティングから離れて外からみてみようというのが僕の発想です。

「生活環境主義」というのは、先ほど僕は天に唾をするといったのですが、自分たちが生活現場の中でやっていることをすぐ問われてしまいますので、単に規制とか反対というのではなくて、日常性の中で、我々が何をしているのかなというそういう見直しから環境問題を考えた方がいいというアイデアでしょう。スポーツの問題もそういうところで考えていかななくてはならない。そういう意味ではスポーツの世界が狭すぎたと僕は思うのです。

○中島(東北大学)：ゴルフ場についてを吉崎さんが詳しくお話になったのですが、「地域社会の中のゴルフ場」というのを私たちはイメージすることが普通です。その際よく議論されるのは、ゴルフ場を作ると雇用がどれくらい創出されるかとかいった問題で、社会学の発想からみるとそういうところは非常に議論されています。あるいは地場産品をどの程度使ってくれるかとか、地域社会にすればそういう発想でゴルフ場というのを捉えようとしています。ゴルフ場と環境との共存、循環という点では農業というもののだけが循環の対象ではなくて、地域の中での循環、共存ということが非常に重要だというふうに僕などは発想します。今後ゴルフ場と環境という場合に、農業も一つの重要な問題でありますけれども、さらに別な要素も環境に含めた形で検討して頂ければと思います。

○司会：東京資本が乱暴に入っていって、地域の社会的、人的、経済的な環境とどうマッチしているのかという問題ですね。吉崎さんその辺、日本中あちらこちらにゴルフ場を作られていますけれども、どういうふうに考えていますか。

○吉崎：だんだんとは変わってくるのではないかと思います。正当な答えにならないかも知れませんが、実はクラブハウス開放ということで、地域の老年寄りがいちばん熱心にやられているゲートボールを冬の間にやりました。福島カントリークラブでは地域の新聞社も巻き込みまして、昨年、今年とやっているのですが、去年は54チームのゲートボールの試合をやりました。今年になりましたら、それが110チームにも増えてしまったのです。そういうことで地域社会とゴルフ場という接点で、単にゴルフ場だけではなくてきたのです。パードウオッチングもあれば、ジュニアゴルフ教室もあるし、あらゆることが、カントリークラブという言葉は、そこで結婚式もみなやるんだという考えがあるのですが、だんだんとそんな方向へ向いていくのかという感じはしています。これはどうかよく分かりませんけれども。

○影山(愛知教育大学)：吉崎さんの大変ユニークな発想でおやりになっているお話を聞いて、非常に参考になりました。問題はゴルフだと思うのです。環境にやさしいゴルフといったらやって、今はゴルフ人口を増やすということが問題だと思うのです。そこら辺は吉崎さんの問題というよりも、我々の方の体育、スポーツ教育の問題といっていいたいと思うのです。

いまカントリークラブというのはそういう多面的な活動の場としていくのだというお話を聞いて参考になりました。しかし将来のゴルフというのがどうなのか。今のままですとやはり環境破壊というものと切っても切れないものだと思うのです。それなのに吉崎さんは「環境にやさしいゴルフ」ということをおっしゃって、ゴルフ人口の拡大ということに、実際手を貸していらっしゃる。ゴルフにというものについて、どういうふうにお考えなのかということの一つ聞きたいのです。

もう一つは「環境教育」というのは子供への教育の問題ではなくて、むしろいままで体育、スポーツは何をやってきたのかという我々への反省を迫る、そういう問題だと思います。そういう意味

で松村さんから今の体育への反省をお聞きしたいのですが、体育があなたのおっしゃるような環境破壊を生み、強化してきたとはお考えにならないのでしょうか。

なぜゴルフなのか、ゴルフは無限に発展が可能なのか、というふうに私の質問を置き換えてもよろしいでしょう。他のスポーツにもあてはまることだと思いますので、ゴルフを例にとって、吉崎社長にゴルフは将来どこへいくのかお聞かせいただきたいと思います。

○吉崎：どこへもいかないと思います。ゴルフ人口が増える環境というのはむしろ大変逆襲的な言い方かも知れませんが、現在のスポーツがだめだからではないのでしょうか。深呼吸一つ出来ないような道路を走らす、あるいは子供たちが寄ってたかって這い上がっていく芝生の山が一つもない。木登りしたくても樹が一本もないほどのグランドだ。

私は高坂小学校という埼玉県の小学校で、大実験をやりました。校長先生にお願いしまして、グランドを全部を芝生にしたのです。そして見てみますと、確かに全然動きが変るのです。また幼稚園の庭をベタ足を直したいからということで全部芝生化しました。

私どもの仕事のひとつで森林公園の中に芝生広場を作りましたら、そこが毎年必ず擦切れてしまうという建設省のお役人がいます。小さい子供の歩きかたの一つ一つは全然影響がないにもかかわらず擦り切れてします。そういう子供たちの動きというものを今の学者の先生方はどういうふうに見ているのか。私は逆にそう言いたい。

多いのを止めようなんてそれは無理です。本能的にゴルフ場に来ます。

社会人になったら、ゴルフ場ぐらいしかスポーツをやるところがないのです。皆さんなんでこんなに高いお金を払って、ゴルフ場にくるのか。「おれは健康のためだ」という人が80パーセント以上です。「ぼけずに長生きで健康で」という3点は希求している。だから私はゴルフはすたれないだろ

うと思っています。特別普及していません。受けて立っているだけです。以上です。

○司会：確かに我々の方で考えますと、大学の一般体育で果して高校時代にやってきたようなバレーボール、バスケットボールでいいのだろうか。ゴルフに対抗するようなもつとチャージングで面白いスポーツを教えれば、もう少し他所へいくかも知れません。たとえば大学が農学部と協力して、乗馬を教えてしまうと、そうしたらゴルフなんかやるより海岸や山を馬で走った方が面白い、となればゴルフ人口は減るかも知れません。そういうようなことなのではないかと思っています。

チュービンゲン大学のクラスサハイという社会学者が、シボルトウントウムベルトというスポーツと環境という論文を書いておりました。その最後の章が、やはりスポーツには無限の発展はないだろう。どこかで我々も自己規制しなければ、スポーツも環境破壊に手を貸すにちがいない。自製をうながした文章で、我々スポーツはどんどん広げること、大衆化すること、みんなに普及することが大事だというその価値観だけで来たのですが、それが曲り角にきたのではないかと思います。

松村先生2番目のご質問にお願いします。

○松村：影山先生の挑発には絶対に乗らないと心にきめて、今日は参りました(笑い)。先ほどの質問の、僕は報告の中でだいぶ申し上げたつもりなので、どうしても何かを言わなくてははいけないという理由はないと思いますので、あえてそれは避けたいと思います。

報告の中でも申し上げたのですが、会津盆地の地主の研究をしたことがあります。その報告は『現代農村における「いえ」と「むら」』(1992年。未来社)に出っていますが、その地主は昭和初期に180町歩集めたのです。その人は決して土地を集めようとして集めたわけではないといひます。いつのまにか借金を返せない農民が多くなって、土地は要らないと言うのに持ってくると申します。会津の某銀行の頭取にもなり、その息子は東大を出て、

その銀行の頭取になって、今は定年でその村へ帰ってきました。社会構造は再生産されるということです。私たちのゴルフやスキーを、私たち自身によって立っているところの何か大きな構造的な問題とからめて考えていくという時に、私は教育の問題を再考する必要がある。つまり新たな視点から体育の問題を取り上げなくてはいけないと思います。

○小椋(天理大学)：吉崎さんから8割の人は健康を求めているから、将来もゴルフ人口が増えるだろうというお話がありました。他方ゴルフ人口が増えるというのはバブル経済とか接待ゴルフとか、企業文化とかそういう側面で増えるところがあって、これから低成長だとかバブル崩壊という中で、接待の見直しというふうになっていった時に、今までみたいには増えないだろうというふうに私は思うのです。私の友人の中でもゴルフをやっている人がいますけれども、自分で会員になって全額自分で払うというよりは会社の会員権接待費、交際費でやっているのです。従って吉崎さんの予測のように増えないのではないかと、そういう外圧があればそうなるのではないかと思います。

○石川(東京工業大学)：私としては現在野外教育やキャンプ、スキーで子供たちの指導に関わっています。今回体育心理学の新たなパラダイムということでスポーツを通しての環境教育というテーマだと思うのですが、社会学の松村先生にすれば大学体育あるいはスポーツに関わっているものとして、こういうような問題意識を持った方がいいのではないかと、あるいは哲学・倫理感を持って取り組めばいいのではないかと、という非常に示唆にとんだお話だったように思います。

吉崎さんの方に関しては、民間の企業の方でこれだけ環境を考えた取り組みをなさっているということで、僕としては驚きであり素晴らしいことだということを感じました。

そこで市村先生はゴルフに関わりを持って取り組んでおられたと思うので、そういう意味では市

村先生に対する質問です。ゴルフに関わってきて、吉崎さんから出ている事業プログラム(シンポジウム資料)で、子供たちにこういうゴルフのレッスンをしているというときに、体育心理を専門となさっている市村先生が、このプログラムの中にどのようなものを入れたら今回のテーマにそぐうような切り口になってくるのか。また私が大学の時に市村先生の授業を受けている中で、今回はゴルフのテレビ収録がありますから授業を休みますというように、かなりやっておられて、私のようにキャンプとかをやっているものに対しての偏った発言等があったと思うのですが、どういう意味での環境教育に対するパラダイムなのか、体育心理はどういうふうな考え方なのか。

○司会：吉崎さんからもお話がありましたように、私たちがゴルフ場といたら、絨毯のような、全くの芝生を期待しています。これは世界中そういうことをゴルファーが期待している限りでは、薬を使わなければならないからゴルフは滅亡するかもしれない。ティーランドとグリーンがきちんとしていれば、その間は雑草でもいいではないか、そこでやるのがゴルフだというような教えかたをしたいと思います。谷間を埋めないということもとても大事なことだと思います。ホールとホールの間が少し遠くてもそれは歩こうよ、スポーツではないか。そういうようなゴルフ場の造成に関する問題もあると思います。

グリーンにいきますと、前の組が打ったボールの跡があります。自分のボールの跡を直す人は多いけれども、他の人のマークも直していこう。人間というのはこの世の中に生まれてきたら、死ぬときには生まれたときよりも少しは世の中を良くして死んでいくものだから、他のマークも直すんだという教育をやる。

体育活動をいうのは、自然と接しながらやる、ダイレクトなエクスペリエンスといいますけれども、直接体験の中で環境に対する認知、環境に対する積極的な態度を育てると、ものすごく良い環境になると思います。

野外教育も最近環境を大事にする登山の仕方とか、やさしい旅行術というようなものがあります。そういうことがやれるのではないか。

最後になりますが、私がこのシンポジウムを企画したのは、戦後私たちが日本の社会を民主主義の社会を育てていくのだという時代には、体育活動を通して民主的な態度を育てようとか、そういう時代の非常に大きな目的の中で体育教育、体育心理学の研究のテーマの影響を受けてきたのだと

思います。それをパラダイム理論というのですが、今現在私たちが挑戦を受けている問題というのは、その環境の問題。そうすると環境とおり合って生きていく人間をどうやって作るかということに私たちは体育を通して貢献できるのではないか。その辺を考えてみたいというのがシンポジウムの提案の主旨であったわけです。

時間が過ぎましたので、これにて閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。

ひとこと

— シンポジウムに参加しての感想 —

愛知教育大学 影 山 健

何はともあれ、今回体育心理分科会が、このようなテーマでシンポジウムを開かれたことに対して、敬意を表したいと思います。

しかし、全体として、スポーツによる環境破壊がなぜ生じてくるのか、その点に対する真剣なアプローチが足りなかったように思います。それは、司会者の方の責任でもあったような気がします。もし、司会者に、そうした姿勢があったならば、

討論の中で、現在の体育に対する鋭い批判ももっと出てきたらと思うと思います。

率直な感想としては、今回のシンポジウムは、あくまでもゴルフ振興のためのもので、「環境教育」や「環境問題」は、そのための手段に過ぎなかったという感じがします。いずれにせよ、ゴルフ振興のために「環境教育」を”食べ物”にしてはいけないと思います。

— 研究会だより —

1992年度 関西体育心理学例会

本年度も、以下のような日程で例会が開催された。毎回20名前後の会員が集まり、研究発表、意見交換、および情報交換の場となっている。

1992年3月13日(金)「一流選手の安静時と黙想時の脳波の変化」

大阪体育大学 荒木雅信

5月8日(金)「メンタルトレーニングの現場への応用とそのデータ」

近畿大学 高妻容一

7月10日(金)「柔道とオリンピック適応」

大阪教育大学 船越正康

8月29日(土)、30日(日)夏期合宿研究会

29日(土) 午前：ゴルフコンペ (庄司ゴルフクラブ)

午後：スポーツ心理学フォーラム

「スポーツ心理学研究の現状と将来」

演者 京都教育大学 和田 尚

岐阜大学 鈴木 壮

甲子園大学 滝 省治

名古屋大学 山本祐二

中京大学 粟木一博

NC ウエルネス研究所 三浦康司

夜：懇親会(犬鳴温泉)

30日(日) 早朝：テニス大会(大阪体育大学テニスコート)

午前：研究発表

「スポーツとストレス」

岡山大学 竹中晃二

「情報処理過程と筋緊張」

大阪体育大学 荒木雅信

10月16日(金)「ボールゲームにおける状況判断能力と知識構造の関係」

大阪教育大学 中川 昭

12月4日(金)「運動の意識化が動作に及ぼす効果」

京都教育大学 和田 尚

伏見工業高校 道越隆夫

【研究発表の要旨】

一流選手の安静時と黙想時における脳波成分の変化に関する事例的研究

大阪体育大学 荒 木 雅 信

武道を含む広義のスポーツ活動で行われている練習や試合前あるいは後の黙想は、精神の集中、反省、調心、調身、調息など、種々の目的を持ち、試合や練習場面では重要な意味を持っている。また、長期間のスポーツ経験を積んだ選手が行う黙想は、内省報告により瞑想に類似したものがみら

れる。瞑想の役割は、心身の安定を得るための行であり(石川, 1989), そこには調心, 調身, 調息というように呼吸を整え姿勢を整えれば, 心が整うといった自己制御の方法が取り入れられている。スポーツにみられる黙想も, 試合あるいは厳しい練習といったストレスから, バランスを維持した

り回復するための生理的な瞑想とも考えられる。本研究では、スポーツにおける黙想の精神生理学的・生理心理学的効用を明らかにするために、脳波成分の変化から黙想と安静の比較検討を行った。

【方法】

1)被験者 剣道高段者（七段教士，六段練士）男子2名，陸上競技短距離（学生一位）女子，シンクロナイズド・スイミング（全日本一位）女子，合計4名であった。

2)脳波記録 多用途脳波計（NEC三栄製SYNAFIT1000）を用い，国際10-20電極法にしたがい，両耳朶連結により，Fz，Cz，C3，C4，Pz，O2の6部位から時定数0.1秒での単極導出により行った。得られた脳波はオンラインでシグナル・プロセッサ7T18A（NEC三栄製）により，1秒間に512ポイントでサンプリングされ，FFT処理により周波数分析がなされた。そして， δ （0.5-3.875Hz）， θ （4-7.875Hz）， α 1（8-9.875Hz）， α 2（10-12.875Hz）， β 1（13-19.875Hz）， β 2（20-25Hz）の各帯域ごとパワーの総和を，30秒間ごとに求めた。さらに安静時と黙想時の脳波を比較するために，FFT処理して算出したパワー値をパワースペクトル・アレーに描いた。また，安静時・黙想時において，実験条件が安定

した270秒間を90秒間ずつ3期（安静-前期・中期・後期，黙想-前期・中期・後期）に分けて比較検討した。

3)手続き 電氣的にシールドされた防音実験室に被験者を座らせ，課題の説明を行った後，次の条件で脳波が記録された。なお，剣道高段者については，黙想時のみ畳に正座した。(1)安静条件 閉眼で身体のを抜き，できるだけ考えやイメージを描かないようにする。(2)黙想条件 試合前に行う黙想の状態をつくる。各条件では，実験者のはじめの合図から5分間続けられた。なお，予備実験の結果から分析対象部位を多くとらず，頭頂部前後左右（Fz，Pz，C3，C4）で十分みられることを確認し4ヶ所を対象とした。

【結果】

被験者1（剣道・七段教士）では，安静時には各測定部位で α 波（8-13Hz）が出現している。特にPzで顕著である。そして，同じ α 波帯域でも， α 2と呼ばれる10-12.875Hzの波が多く出現している。しかし，黙想時において，安静時で出現していた α 波はわずかに発生しているものの，一般的に α 波の発生が抑制されている。他の被験者では，特徴的な傾向はみられなかった。

メンタルトレーニングの現場への応用とそのデータ

近畿大学 高 妻 容 一

最近，メンタルトレーニングの研究や現場での応用が話題になるようになってきた。しかし，その具体的な方法については，各スポーツ心理学者やコーチ，選手によって違うようである。そこでこの研究では，20-30もある各テクニックを総合したプログラムを作成し，そのプログラムに従いメンタルトレーニングを実施した。特にメンタルトレーニングを受け入れにくいスポーツとして武道

に注目し，研究という形より選手へのサービスという形式を優先した。

被験者は，実験群として大学柔道部員55名，統制群として大学日本拳法部員40名であった。実験群は，基礎メンタルトレーニング期間として練習前の30-60分を費やし合計50回（2ヵ月）のプログラムを実施した。その基礎プログラムの開始前（Pretest）と終了後（Posttest）にTSMI（体協

競技意欲検査)とDIPCA(心理的競技能力診断検査)を用いてメンタルトレーニングによる心理的变化を分析した。同時に、選手が目標設定や自己分析などを書き込んでいく用紙を1冊の本にしたものを実施させ、トレーニングによる心理的变化が確認できるようにした。また、練習日誌やメンタルトレーニングに関する論文や評論を読んだ感想文、各試合後の自己評価用紙と試合中の心理状態についての調査、心理テストの結果やチーム全体の自己分析結果を表にして渡すなどのフィー

ドバックもプログラムの一部として実施した。

結果は、心理テストから見たメンタルトレーニングの効果はもちんのこと、選手のやる気、心理状態、練習や試合態度に変化が見られ、何人かの選手はコーチが驚くほどの心理的变化が見られた。同時に予想もしなかった成績をあげた選手も出て、内省報告やデータからもその成果を証明できた。その後も、中級編・上級編とプログラムにそってメンタルトレーニングを実施している。

柔道とオリンピック適応

大阪教育大学 船越正康

ソウルオリンピックを前にスタートした特別強化スタッフ制度は、スポーツコーチを中心にスポーツカウンセラーを含む6人体制である。この制度は指定選手の資格や持ち点制および予算執行基準の変更を繰り返しながらバルセロナへ継承され、その活用が軌道に乗った種目と不満の残る種目があるようである。

発足当初に柔道の重量級選手を担当し、更に心理的サポートの特別指定種目に柔道が送定された経緯もあり、主力選手との1年半にわたる接触のもとに、ソウルにおける勝敗因分析を体協宛報告した。(編は“ソウルオリンピック出場選手へのメンタルマネジメントの実施とその結果、スポーツ選手のMTに関する研究—第4報—II, 1989”に集録、今一編は“適性論からみた柔道選手の特徴とオリンピック適応—特に精神的側面から—、競技種目別競技力向上に関する研究—第12報—I, 1989”である。前編はTSMIの仮平均値に見られる成績上位者の高得点傾向の指摘をはじめ、記号化表示を利用したコンディショニング把握、ロギセラピーを前提としたカウンセリング事例を紹介し、後編はU-K法を用いて成績上位集団における特定人柄の出現率の増加と精神健康度水準の高

さを指摘した。

その後、全柔連医科学委員を引き受けた立場から、武道学会において“柔道に関する意識の因子分析(F-A)的研究”5編を発表する中で、主要男子強化選手の個人別意識分析の下にカウンセリングへの適応を試みてきた。本発表はバルセロナへ出発する直前のこともあり、柔道界のオリンピックへの取り組み方、U-KおよびF-Aデータと柔道行動の関連を中心に、オリンピック出場選手の実態分析に焦点が当てられた。最終的に、素質側面の認識に基づく適性の弁別とともに、精神的健康を高めるための指導とコンディショニングの有効性および柔道に対する意識水準のバランスが鍵と考えられた。結果的にカウンセラーとしての担当選手の成績はすべて銀であった。

夏期合宿研究会

去る、1992年8月29、30日両日、大阪体育大学浪商倶楽部において研究会が催された。会の主なテーマは「スポーツ心理学の現状と将来」であった。スポーツ心理学の知的体系化を目標として幅広い分野からの話題提供があり、活発な意見交換が行なわれた。

29日は、6名の話題提供者がそれぞれの研究分野についての話題提供を行なった。その要旨は以下の通りである。

○和田 尚（京都教育大学）：体育・スポーツ全体におけるスポーツ心理学の動向を分析するために実施された実態調査の発表が行なわれた。これに関して、大衆・生涯スポーツに関連した発表数が少ないこと、競技スポーツを対象とした研究の実践場面への応用性の問題点が指摘された。さらに、その問題点に、スポーツ心理学がどのように寄与するのかといった議論がなされた。

○鈴木 壮（岐阜大学）：1980年以降に口頭発表、学会誌掲載論文から運動選手に対するカウンセリング、メンタルトレーニング適用例を抽出し概観を行なった。この研究分野の発展には、カウンセリング、メンタルトレーニングの有効性の機序に関する説明、競技成績との関連性についての調査の実施が不可欠であるという意見が述べられた。

○滝 省治（甲子園大学）：抑鬱感情の軽減に対するジョギングの効果をいくつかの質問紙を用いて調査した結果が紹介された。長期間のランニングによって統計的に有意ではないものの抗抑鬱状態への若干の変化が認められたという報告がなされた。

○山本裕二（名古屋大学）：運動学習、制御においてエラー、パフォーマンスの新しい考え方を紹

介し、従来の実験課題では実際のスポーツ場面への知見の応用が困難であるという問題提起が行なわれた。その後、実際の運動場面に近い実験課題として開発中の実験装置のデモンストレーションが行なわれた。

○栗木一博（中京大学）：MaCclagh（1989）が発表した観察学習研究を概観した論文が紹介された。発達したビデオ機器と比較してモデルの提示方法が確立されていないといった意見が述べられた。

○三浦康司（NC ウェルネス研究所）：健康の概念を幅広くとらえたウェルネスを定義し、その実現に向けてトランスパーソナル心理学の考え方が紹介された。人間関係の調和、ストレスの管理に対してライフスタイルの変革などの積極的な対処が必要であるといった指摘がなされた。

この他、発表テーマに関してだけにはとどまらず自由な雰囲気の中で長時間にわたって有意義な議論が行なわれた。非常に広範な研究分野からの話題提供があったためか、まとまりに欠ける部分はあったが、このような研究発表の場を設定することと、調査、実験の積み重ねることがスポーツ心理学の展望を明確なものにし、その発展を促すものとする。（報告者 栗木一博）

ボールゲームにおける状況判断能力と知識構造の関係

大阪教育大学 中 川 昭

〈研究会発表要旨〉

まず、第1に、本発表のテーマが現在重要な研究課題になるに至った研究経過について説明した。すなわち、これまでに状況判断能力がボールゲームにおけるゲーム成果を規定する重要な技能要因であること、そして状況認知や状況予測といった知覚的能力が状況判断能力の優劣と大きく関わっていることが実証的に明らかにされており、次に明らかにされる必要がある問題は「それでは一体、状況判断能力の優劣は何によって規定されるのか」という問題であることを説明した。

第2に、この状況判断能力を規定する要因を明らかにする研究が二つの方向からアプローチできることを示した。すなわち、一つは視力や奥行知覚能力のような一般能力特性の違いからアプローチする方向であり、もう一つはプレーヤーが長期

記憶の中に貯えている知識の量及び質の違いからアプローチする方向である。しかしながら、実践的意義の大きさという見地から考えて、後者の方向の方に研究努力を注ぐべきであることを説明した。

第3に、チェスプレーヤーの知識構造について今までに行われている研究を紹介し、チェスプレーヤーの知識構造とボールゲームプレーヤーの知識構造の類似点及び相違点を述べた。また、これらのチェススキルの研究で使われている実験手法がボールゲームプレーヤーの知識構造を研究する際にも適用可能であることを指摘した。

そして最後に、ボールゲームにおける状況判断能力と知識構造の関係を検討するために、現在、筆者が計画している2つの実験を紹介し、ディスカッションの材料とした。

運動の意識化が動作に及ぼす効果

京都教育大学 和 田 尚

伏見工業高校 道 越 隆 夫

「目的」教育現場における教授－学習過程の実践的問題として、指導者の教示と学習者の動作との関係に着目した。具体的には、教示のポイントの差異が運動の意識化と動作に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。

「方法」対象：大学生男子18名（サッカー部）

運動課題：立ち三段跳び、

実験手順：指導のポイントを①踏切時の腕、②振り上げ脚、③着地時の脚とし、A群（言語教示）、B群（言語＋視覚情報）、C群（統制群）の等質な3つの群を設定した。各群とも10試行／1日を10日間行い、10試行のうち後半の5試行を記録・撮影した。ポイントの指導は各試行の前に行った。動作

の分析は、ビデオ解析システムを使用し、腰角度、膝角度、膝角速度、腕位置、腕角速度等を求めた。

「結果」記録の伸びは3群ともにあったが、特に、A・B群で顕著であり、指導の有効性を示した。経日的変化を見ると、群間の差は統計的に示すことは出来なかったが、B群のホップ時の腰角度に顕著な変化がみられた。つまり、脚の振り上げを高くしようとする意識が、動作に具現したと考えられる。A群でもホップ時の腰角度やジャンプ時の膝角度に変化が認められた。これらの結果は、言語教示や視覚情報が運動への意識化を促し、動作に効果的に作用したことを示唆している。

会 務 報 告

1. 1992年度専門分科会総会報告

日時：1992年12月23日（水）

12時00分～12時30分

会場：大妻女子大学553教室

進行：上田雅夫（専門分科会代表者）

報告事項

- 1) 専門分科会選出「評議員選挙」に関する件。事務局より会報4号35頁に掲載されている19名が選出された旨報告があった。
- 2) 会員数に関する件。事務局より会費自動払者数の報告があった。会員総数は536名である。
- 3) 会報4号の発行に関する件。事務局より1991年度会報が1992年6月10日に発行された旨報告があった。
- 4) 専門分科会シンポジウムに関する件。本日のシンポジウムを開いた経緯について事務局より報告があった。

承認事項

- 1) 1991年度収支決算に関する件。事務局より会計報告があり、お茶の水女子大学の加賀秀夫先生と東京学芸大学の杉原 隆先生の会計監査報告を受けて、承認（資料1）。
- 2) 会報第5号に関する件。事務局から前年度同様の編集方針が提案され、承認。
- 3) 第44回大会（兵庫教育大学）のキーノートレクチャー及びシンポジウムに関する件。運営委員会に一任された。
- 4) 第44回大会の一般演題の発表時間に関する件。大会当番校が提案した一発表6分、討論3分、計12分について審議したが、最終決定は運営委員会に委ねられた。
- 5) 事務局変更の件。1987年4月から現在に至る約6年間、早稲田大学人間科学部スポーツ心理学研究室が事務局を担当してきたが、次年度には全国的な学術大会を引き受けることから人手不足となること、さらには一大学が長く事務局を持つことに対する弊害等を変更願いの理由とした。これに対して、会場から複

数の意見が述べられ、最終的には運営委員会に決定が委ねられた。

（資料1）日本体育学会体育心理学専門分科会

1992年度収支決算報告

自 1991年10月8日

至 1992年12月23日

収入の部

前年度繰越金	894,472
分科会補助金	100,000
年会費	549,000
受取利息	1,122
合計	1544,594

支出の部

会報関連費	390,420
通信費	139,432
事務局事務費	140,017
雑費	75,450
合計	745,319

次年度繰越金

合計	799,275
----	---------

2. 事務局からのお知らせ

1. 会費は自動払いになっております。自動払い者の名簿は学会本部より事務局に届けられます。事務局はこの名簿に掲載されておられる方々にのみ、会報送付やその他の連絡をしております。入会希望者は会費の自動払いをお願いします。委細は学会本部まで照会下さい。

2. 住所、所属の変更、改姓があった場合には、学会本部と同時に分科会事務局にもお知らせ下さい。学会本部に届けられても分科会事務局には連絡されません。

3. 本年度の日本体育学会は兵庫教育大学（会場は大阪市内に分散）で11月16日～19日の4日間に渡って開催されます。体育心理学専門分科会としましては、キーノートレクチャーとシンポジウムを会期中に持つべく、各運営委員のアンケートをもとに、候補者と鋭意折衝しています。

編集後記

第5号は昨年開かれました日本体育学会体育心理学専門分科会のシンポジウムを特集としました。司会者及びシンポジストの先生方には、原稿校正等で多大なご協力頂きました。深く感謝致します。

全国各地で体育心理学の研究会が持たれていると思います。研究会をお世話しておられる先生方からの投稿をお願い致します。形式は問いません。研究会の形態、メンバー、取り上げられたテーマ等を800字程度で紹介して頂ければ助かります。

今号では関西体育心理学例会から、昨年度に引続きご投稿を頂きました。関係者の先生方には紙上をお借りして厚くお礼申し上げます。

会員の自由投稿も歓迎致します。